



S
o
m
a
x
o
m
a
S
o
m
a

プロローグ～それは未来を創る物語～

戦いを忘れた人々の平和なはずの日常が不安と言う影に飲み込まれつつある時代。

神戸の街を舞台に人知れず繰り広げられる戦いがあった。

それは始祖のアルカナ『愚者』ブラフマンを名乗る者によって立案され、巨大な権力の後ろ盾を受けて実行された神をも恐れぬ計画。

タロットを神に至る教典に見立て、アルカナの暗示を受けた異能力者達を互いの手にしたカードを賭けて戦わせる。

そして、全てのカードを手にした者を終局のアルカナ『世界』、つまり全知全能の神へと導くと言うものだった。

ある冬の日。

稲光を放ちながら全てを飲み込むような真っ黒な雲が、夜空に浮かぶ月を覆い隠そうとする中

。

約一年に渡る戦いも最終局面を迎えようとしていた。

大小様々なクレーンや作業灯から発せられる無数の光の灯火が浮かぶ埠頭の倉庫街。

コンテナの合間を縫って暗躍する人影が二つ。

一人は黒髪で日本刀と拳銃を持ち革のジャケットにパンツを着用した青年。

一人は銀髪で傘を持ちスーツの上に羽織ったコートのポケットに手を突っ込んだ青年。

そして、少し離れた所から長い銀髪を二房のツインテールにしたゴスロリ衣装の少女が二人の青年を見守っている。

闇に銀色の輝きが閃く。

黒髪の青年の持つ日本刀が無防備な銀髪の青年を襲う。

斬る、斬る、斬る。

何度も、何度も続け様に斬り掛かる。

鋭い斬撃によって細切れとなった何かが、バサバサと言う音を立てて散って行く。

そして、止めを刺すようにその胸を狙って突きを放つ。

だが、銀髪の青年はまるで面白い物を見ているかのように黒髪の青年を見ると、その整った口元を不敵に歪ませた。

黒髪の青年は不気味な物を感じ、距離を置き態勢を整える。

銀髪の青年は無傷だった。

異力者特有の周囲を自分の領域に置き換える為の不可視の壁に阻まれた訳でも、彼が身体能力を駆使して避けた訳でも無い。

攻撃が当たらなかったのだ。

日々の鍛錬と実戦によって鍛えられた正確無比な攻撃がだ。

突風によって死角から飛んで来た布によって攻撃を阻まれ、それを銀髪の青年だと錯覚してしまったのだ。

能力への耐性も鍛えている為、幻術等に向けられた恐れも無い。

つまりは偶然だった。

銀髪の青年の持つ恐ろしい物の片鱗を味わった黒髪の青年は拳銃を構えて牽制する。

しかし、銀髪の青年はそんな事など全く意に介せず、不敵な笑みを浮かべ無防備なまま黒髪の青年へと歩み寄ろうとしていた。

思えば銀髪の青年に飲まれていたのだろう。

黒髪の青年は自分の中に芽生えた恐怖を打ち払うかのように拳銃を撃とうとする。

だがその時、近くの大型クレーンに落雷し、激しい光と大地を揺るがすような轟音によって狙いを外してしまう。

銀髪の青年をかすめた弾丸はコンテナに当たって跳弾し、ドラム缶を吊したまま停まっている小型のクレーン車の燃料タンクを撃ち抜き爆発する。

横倒しになった小型クレーン車は黒髪の青年を襲い、彼はまるで虫けらのように弾き飛ばされコンテナに叩き付けられた。

幾ら防刃・防弾効果のあるカーボンケプラーと、衝撃吸収に優れたダイラタンシー材を複合したプロテクターを服の下に着込んでいると言っても無傷とは行かない。

黒髪の青年は全身打撲によって内蔵にダメージを受け血反吐を吐く。

そんな彼に追い打ちを掛けるように落下したドラム缶から揮発性の油が漏れ出し、炎上する小型クレーン車から飛んで来た火の粉によって爆発した。

火の付いた無数の金属片が黒髪の青年を襲う。

黒髪の青年は咄嗟に露出した顔面を守るものの裂傷は避けられず、更には周囲に飛び散った油が引火して彼を飲み込もうとしていた。

様々な状態を想定して作られた彼の服も、これだけの炎に対応する事は出来ない。

まさに絶体絶命であった。

そんな彼に銀髪の青年が歩み寄る。

天変地異とも呼べる程の偶然の連鎖の中、彼はあくまで不敵な笑みを崩さず何事も無いかのように歩いていた。

彼は無傷であった。

クレーン車は銀髪の青年を避けるように横倒しになり、それが壁になり無数の金属片は遮られ、火の手は誘発した小規模な爆発によって消されたのだ。

まるで神に愛されているかのように偶然は彼を助け続けた。

偶然を操作する。

それはこの戦いを最後まで勝ち抜いた彼...、No.19『太陽』の大アルカナを持つ最強と呼ぶに相応しい者の力であった。

降り出した冷たい雨がふり注ぎ炎は鎮火し周囲は水蒸気に包まれる。

銀髪の青年は傘に隠されたサーベルを抜くと、満身創痕となって倒れ臥せた黒髪の青年に突きつける。

「ふっ、だから言っただろ...？ 力を持たざる者ではボクには勝てない、あの娘を救う事は出来ない...ってね！」

「力...？ 力ならあるさ...。

アイツが言ってくれた...、特別な力なんて無くたって...、俺には運命を変え...、未来を作る力があるって...。

でも...、それは俺だけが持っている力じゃない...。

どんな時でも決して諦めず...、自分に出来る事をやり続ければ誰だって...、誰にだって使える力なんだ...」

突きつけられたサーベルを手で掴み、力づくで押しのけながら立ち上がる黒髪の青年。

到底立ち上がれるような傷では無い。

到底無能力者が敵うような相手では無いはずだ。

なのに、それなのに、この黒髪の青年は立ち上がる。

剣を握る。

銃を構える。

希望に満ちた視線を向ける。

なんだ...！？ なんなんだ、この男は...！？

銀髪の青年は無意識の内に後ずさりし、自分が汗をかいている事に気がついた。

トレードマークである不敵な笑みも崩れている事だろう。

ここに来て初めて恐ろしいと感じていたからだ、この黒髪の青年を。

異能に頼る事無く運命を変え、未来を作る事の出来る力が本当にあるとは思えないが、この男にはそれを信じさせる何かを持っている。

無能力者でありながら偶然にもNo.20『審判』のカードを手にし、この戦いを最後まで勝ち抜いただけある。

まさしく、愛する者の運命を賭けて戦い合うのに相応しいライバルだと言う事だ。

「良いだろう、見せてもらおうか...！！ 君の言う力って奴をね...！！」

ここに来て初めて本気でサーベルを構え、正面から対峙する銀髪の青年。

その表情に今迄の作られた不敵な笑みでは無い、心から楽しそうな笑みが浮かんでいた。

「ああ...、見せてやるよ...、俺の力を...！ アイツが信じてくれた力をな...！！」

雷鳴が轟くと同時に駆け出し、稲光が作り出す影の中で交差する刃と刃。

「あの娘を救うのは...、このボクだ...！」

「アイツを救うのは...、この俺だ...！！」

稲光が作り出す大型クレーンのシルエットの上。

白いフード付きの外套を頭から冠った誰かがその戦いを観戦していた。

その姿を見てゴスロリ衣装の少女が呟く。

「宇宙意思を司り全てを識る者...、ブラフマン...。

お父様、お母様...。

真に罪深きは運命を弄ぶ私達で御座いましょう。

この縛られし運命こそ私達に架せられし罪に他成りませんわね。

ですが、私は絶望なんて致しませんわよ。

長い戦いの旅路の中で本当の力を手にしたあの方ならば、きっと私を解放して下さいと信じていますから」

少女は切れ長の目を優しく細め、薄い唇を僅かに歪めて微笑んだ。

2012年12月21日。

マヤ暦に刻まれた古い時代が終わり、新たな時代が始まろうとする時。

夢と現実の狭間に生きる一人の少女と世界の未来を賭け、過去と現在の二人のソーマが交差する。

Soma x Soma

それは未来を創る物語

双間優斗～それはこの物語の主人公～

「君の存在は私の研究を実証し夢へと導いてくれる希望そのものだ。君には期待しているので是非とも頑張っていて欲しい」

「解ってますって、教授っ！ 俺頑張っちゃいますからー！」

2012年5月。

心地よい陽気と新緑に包まれた神戸のとある大学。

短い黒髪をワックスでカールさせた青年は教授らしき初老の男に頭を下げると、木漏れ日が射し込むキャンパス内を学食に向かって歩く。

流行の最先端に行くファッションに身を包んだ四人の女の子を引き連れながら。

「みんなー、昼飯ぐらい俺が驕ってやるぜー！！」

「きゃーっ！！ 奏くんったら太っ腹っ！！」

関西なまりのイントネーションで女の子にもモテモテ、教授にも期待されている如何にも軽そうな男の名は近江奏矢。

この大学でも有名なリア充だった。

「ちっ...、リア充爆発しろよ...」

すれ違い様にそれを見た黒髪の青年は思わず舌打ちをして悪態を付いた。

独り言を口にする癖は持ち合わせて居ないが、人間は本当に不快な物を目にすると反応を隠し切れなくなるのかもしれない。

そう考えながら購買のビニール袋を下げて一人寂しく歩く男の名は双間優斗。

彼こそがこの物語の主人公である。

双間優斗は楽しくキャンパスライフを謳歌する学生達から目を伏せながら経済学部本館棟へと向かった。

この大学のキャンパスには文化財登録された歴史ある建物が四棟存在するが、その中で最も古い昭和七年に竣工された建物である。

時計台のある塔屋を中心に左右対称に横に大きく広がっている鉄筋コンクリート造の三階建てで、外装はベージュのスクラッチタイル張りとなっている。

過去に発行された文化庁月報ではロマネスク様式を基調として、軒にはテラコッタ製の小アーチを列ね、壁の角部を柔らかいアールで処理していると紹介されていた。

解りやすく言うと線の柔らかいレトロな建物だと言う事である。

双間優斗は正面のアーチ状の車寄せのあるポーチを潜り、重厚感のある玄関の鉄扉を押しつけて、時計台の裏側にある大理石張りの中央階段を登る。

下半分にタイルが張られた柱が何処までも連なるヨーロッパの古城の回廊を思わせる廊下を歩いて向かう先。

それは男子便所の個室であった。

何をするかと言うと、それはもちろん昼食を取る為である。

双間優斗はお世辞にも穏やかな心の持ち主とは言えず、食堂や講堂等の人の多い所に行くとい

ラつく事ばかりで、昼食をゆっくり食べる所では無いのだ。

この時間、経済学部本部棟の便所は利用者が少なく、誰にも顔を合わせる事なく一人で食事を取るのに適していた。

まさしく、この地獄のような世界で唯一心休まるオアシスである。

食べ物の成れの果てを排出する所で食事を取る事に批判はあるが、彼のような便所飯愛好家達はマナーさえ守れば問題無いと思っている。

それは臭いのキツイ肉類等を持ち込まない事、ゴミを便器に捨てたりせずに持ち帰る事、長時間占領して本来の使用目的をする人の邪魔をしない事等である。

当然、双間優斗も例に漏れない。

ベジタブルサンドと日高昆布おにぎりと言った比較的アッサリとしたものを食べ終わると、ビニール包装を購買部の袋に入れて足早に立ち去ろうとする。

だが、個室の扉を開けた瞬間、露骨に嫌な顔を浮かべた。

同じ学部の会いたく無い男が小便器に向かって勢い良く小水を放出していたからだ。

「よお、双間さ。今日もまた一人で便所飯だべか？」

短く苧った髪を金色に染めた男は股間の雫を払いながら、明るい東北なまりで双間優斗に声を掛ける。

彼の名は宮城楽。

東日本大震災による放射能汚染から逃れる為、家族で遠い神戸に引っ越して来た男である。

「俺はリア充共に囲まれながら一人で飯を食う図々しい神経を持ち合わせて居ないんだよ。お気楽なお前と違ってな」

そう言うと宮城楽を置いて便所を出ようとする双間優斗。

その後を急いで手を洗った宮城楽が追掛け、二人並んで廊下を歩く形になる。

「そんな事言うなよお、双間さあ。オラ達二人とも故郷を離れて馴れない土地で暮す身だべ？
今度は二人で仲良く飯食おうぜ！」

そう、双間優斗も宮城楽同様に訳あって故郷である東京を離れていた。

ただし、宮城楽のような御涙頂戴的なリアル指向な事情では無く、人には言えない後ろめたくも情けない事情でだ。

それは双間優斗特有と言っても良い生来のやる気の無さが起因していた。

そう、高校をサボりまくりなんとか卒業したは良いが入れる大学が無く、やむを得ず神戸の大学で教授をする叔母を頼って裏口入学を果たしたのだった。

更には叔母の家に下宿させて貰っている。

当然の事ながらアルバイトをして少しでも生活費を入れようとする殊勝な心がけは持ち合わせては居ない。

宮城楽は大学が終わってからアルバイトをして家計を助けていると言うのに。

人一倍虚栄心の強い双間優斗は、自分と似て非なる宮城楽を比較して落ち込むのが嫌なので極力一緒に居たく無かった。

「二人仲良く...？ 嫌なこったね」

その結果出た言葉がこれである。

そう、何処迄も器の小さな男...、それが双間優斗なのである。

「双間さあ、お前この後の講義どうするべっか？」

不自然な程の早歩きで経済学部本部棟を後にする双間優斗の背中を追う宮城楽。

しかし、小柄で体力の無い双間優斗と比べて、圧倒的に優れた体格と運動神経を持つ宮城楽にとって、そのスピードはゆっくり歩いているのに等しかった。

「サボる。この時間だったら叔母さんも、五月蠅い奴も居ないし、家に引き籠もる」

この後に及んでサボり癖が治っていない上、引き籠りまで併発するとは中々出来るものじゃない。

「じゃ、オラもサボるから、一緒に遊びに行くとすっか？」

宮城楽は大股で双間優斗の前に回り込むと、まるで孤独な彼を包み込む菩薩のような優しい笑顔を向ける。

「はあ、なんでだよ！？ お前はちゃんと講義出るよ！ 絶望しか無い俺の人生と違って、有益なお前の人生を無駄にすんなよ！！」

それにドヤ顔で返す双間優斗。

「おっ、無駄にカッコ良いべ！！」

いや、残念ながら無駄にもカッコ良くないだろう。

「いや、よく考えたらお前はどうなっても良いわ。サボっても良いけど俺の時間を邪魔しないでくれよな」

双間優斗はよくよく自分の言葉を考え直し、宮城楽に指を突き付けながら言う。

「友達にそんな事言うなっぺ！」

「トモダチジャナイ。オレニトモダチイナイ」

「なんで、片言だっぺ？」

「知らん、俺は帰るからな」

と言って本当にキャンパスの門から出る双間優斗。

この男、本気である。

「あ、まってけろ！！」

朝日空～それは五月蠅い妹のような存在～

双間優斗は宮城楽を連れ立って住宅街の急坂を登っていた。

彼が目指しているのは下宿先、大学を出て北に向かった六甲山の麓にある叔母の住む団地である。

「ふうっ、毎度の事ながら軽いハイキングコースだべな」

「ああ、まったくだな...、ってだから何でお前が付いて来るんだよ？」

「お前の下宿先にオラのバイク停めさせてもらってるの忘れたっぺか？」

「ああ、そうだったな...」

二人の通う大学は阪急神戸線の六甲駅から六甲山方面に坂道を登った所にある。

だが、その坂道があまりに険しい為にバイク通学をする生徒があまりに多く、通勤時間帯の周辺道路は神戸の東南アジアと言われるような渋滞となる。

そんな状況であるからして当然のように交通事故が多発し、バイク通学の自粛を大学が通達する程である。

だが、バイク通学を完全に締め出す事は出来ないのが現状だ。

神戸は南北を分断するように六甲山があり、南の海側と呼ばれる市街地を東西に走る交通網は発達している。

だが、北の山側と呼ばれる田園地帯に向かって南北を横断する路線は少なく、その方面に住んでいる生徒はバイクが無ければ通学が困難だからだ。

宮城楽も例に漏れず故郷から運んで来たバイクで、北区の山側にある住宅街から裏六甲、表六甲と呼ばれる峠道を走り、渋滞している大学の駐輪所まで通学していた。

だが、双間優斗が大学教授をしている叔母に話したら、好意で自分の住んでいる団地の駐輪所を使えるようになったのだ。

全く余計な事は話すものじゃないと、今になってそう思った双間優斗であった。

暫く歩くと目的地へと辿り着く。

六甲山のケーブルカーの駅周辺にある、昭和43年頃に建てられたレトロな団地だ。

その建物の横には二台のバイクが停まっている。

転倒によってボロボロになったフルカウルをガムテープと結束バンドによって固定した、白を基調に赤いアクセントを施したレーサーレプリカ。

宮城楽のYAMAHAのTZR250SPRである。

一方で隣に並んでいるのは金色のパイプを組み合わせたようなフレームに、深紅のタンクと特徴的なL型空冷エンジンがマウントされたカウルレススタイル。

双間優斗のDucatiのMonster900。

若くして死んだ彼の叔父が所有していたイタリア製のバイクである。

双間優斗は東京に居る時に高校をサボって中型自動二輪、大型自動二輪、普通自動車免許を取得していた為、神戸に来た際に柵から牡丹餅的に叔母から譲り受け物だった。

「ふっ、勝ったな...！」

それを見て勝ち誇る双間優斗。

人のバイクを馬鹿にするとは、バイク乗りとして最低の行為である。

しかも、その矮小な自尊心を満たしているバイクは、自分で対価を払って手に入れた物でも、自分の手足のように乗りこなした物でも無いと言うのに。

「いやあ、ホントオラの負けだべ！！ こんなカッコイイバイク他に無いっぺよ！！」

しかし、そこは宮城楽。

素直に自分の負けを認め、双間優斗のバイクの良さも認める器の大きさを見せる。

「ぐぬぬっ…」

これには双間優斗も苦い顔である。

「そうだ、今度、二人でツーリングいくべ！！」

「まあ…、暇があればな」

暇しか無い男が何を言うか。

「あ、お兄ちゃん！ また学校サボったん？」

双間優斗と宮城楽が声がした方を振り向くと、少し青みがかかった黒髪をショートカットにした小柄な少女が居た。

ここから一駅分西に行った所にある兵庫県立高校指定のセーラー一服を着用し、頭頂部には黄色いリボンを付けている。

彼女は朝日空、双間優斗が下宿している叔母の娘である。

「オッス、空ちゃん！ 相変わらず可愛いべなあ！！」

「楽くんこそ、相変わらず御上手やね！」

朝日空と宮城楽は互いに挨拶を交わす。

「んで、お前こそ学校はどうしたんだよ…！？」

「今日は午前授業やわ」

「ちっ、折角フリーダムタイムを楽しめると思ったのにな…」

「だったら、一緒に映画行かへん？ お母さんから貰った今日まで使える共通映画鑑賞券があるんや」

「はあ、何で俺がお前と映画なんて行かないと行けないんだよ？」

「だ、だってチケット無駄にしたら勿体ないやないの？」

「それだったら、宮城と行ってくれば良いだろ？ そうすれば俺はフリーダムタイムを発動出来るし一石二鳥だぜ」

「一緒に行かんと…、学校サボった事お母さんに言いつけるで！」

「くっ、何て卑怯な奴なんだ！」

「ふふんっ！」

朝日空は勝ち誇った顔だ。

「双間さは、相変わらず空ちゃんからモテモテで羨ましいっぺ！！」

「な、な、な、何言うとんっ！？」

朝日空は思わぬ言葉に明らかに動揺していた。

「そうだぜ、馬鹿も休み休み言えよ。第一、こんな口五月蠅い妹みたいな奴からモテても嬉しくないがな」

「お兄ちゃんのアホお！」

と双間優斗は朝日空の鞆で思いっきり叩かれた。

「あだっ！！ 何すんだよ！？」

双間優斗は涙目になる。

教科書が入った鞆での一撃は、冗談では無く本当に痛かったからだ。

「あははっ、二人って本当に仲良いべな！！」

「何処がだよ！？」

「何処がや！？」

双間優斗と朝日空は同時に突っ込んで、互いに顔を見合わせて真っ赤になる。

「じゃあ、オラはお邪魔にならんように退散するっぺか。二人が上手く行くように祈ってっぞ！！」

そう言うと宮城楽は自分のバイクに股がり発進した。

「アイツ、あれで空気読んだつもりかよ？ 全然空気読めて無いつつ一の、な？」

双間優斗は隣にいる朝日空の方を振り返る。

「ふえっ！？」

だが、朝日空は顔を真っ赤にして硬直していた。

「あの、空さん如何致しましたか？」

「な、なんでもないっ！ それより、さっさと支度して行こかっ！！」

そう言うと朝日空は大股で階段を上がって家に向かう。

「ふう、一体なんなんだか...」

それを見て双間優斗は呟く。

全く持って人の気持ちを考えない鈍い男...、それが双間優斗。

だが、その鈍さが後々世界の命運を賭けた大事件へと発展して行く事を彼はまだ知らない。

デート～その思いを彼は知らない～

双間優斗と朝日空は団地を出るとDucatiMonster900に乗り県道95号線を南下する。

神戸と横浜は類似点が多い為に比較される事が多いが、双間優斗のような関東人が横浜の感覚で神戸に行くとなを食らう。

横浜は平地だろうが斜面だろうが関係無く何処までも住宅街が続いているのに対し、神戸の主たる住宅街は東西に続く海岸線と六甲山の間で僅かな区間に存在している。

そう、まさに僅かと言う言葉がピッタリな程、そのエリアが狭いのである。

神戸の中で比較的高い位置にある朝日家からでも、海岸沿いを東西に通る主要幹線道路までの道のりは大凡3km。

前述の通り坂が険しいので歩くとかなり大変であるが、道路が空いている時間帯に自動車やバイクを使用すると、5分も掛からず本当にあっという間である。

そして、その主要幹線道路...、国道2号線で右折する。

マクドナルドやサイゼリア、すき屋等の大手外食チェーンが連なる開けた道を西に向かうこと約7km...、10分程走ってメリケンパークの駐車場にバイクを停める。

神戸のランドマークであるポートタワーや、カワサキ重工の博物館、オリエンタルホテル等を擁するメリケンパークの駐車場はバイクを一日停めて100円と安い。

また、若者や家族連れに人気のハーバーランドや、神戸の中心地である三宮駅や、日本三大中華街の一つである南京町にも近いのでバイク乗りにも人気である。

いや、バイクを正規に止められる場所が少ないので他に選択肢が無いとも言えるが。

バイクを降りた二人は海沿いの遊歩道を歩いて移動する。

「しかし、お兄ちゃん運転下手やね...。うちみたいに身体が丈夫な子やなかったら、ゲボ吐いたったかも！」

朝日空は双間優斗に言わずには居られなかった。

「ぐうっ...、それは俺が悪いんじゃないんだって...！！」

自分でも気にしている痛い所を突かれて双間優斗は汗を吹き出した。

「あ、すぐそうやって言い訳するんやから！」

ジト目で見ると朝日空。

「ホントだっば、あのバイクが変なんだよ...！」

双間優斗が思わず言い訳をしてしまうのも無理は無い。

Monster900はある程度スピードを出して走っている時は野太い音と共に力強く地面を蹴り、バイクに乗る楽しさを具現化したような感覚で気持ちが良い。

しかし、低速走行にはトルクバンドとギアがマッチングせず、エンストするのでは無いかと思う程にギクシャクするのだ。

しかも、ハンドルバーの幅が異様に広く低い位置にある為、双間優斗のように小柄な体型の日本人が乗ると、脇を開きながら前傾すると言う世にも奇妙なポジションになる。

更に硬いフロントサスやバックトルクの強さと相まって前方に過重がかかりやすく、信号や渋

滞でストップアンドゴーを繰り返すと途端に掌が痛くなる。

特に二人乗りしている時は余計である。

もの凄い勢いでパッセンジャーの体重がライダーに襲いかかり、ニーグリップが甘いとタンクで股間を押し潰し悶絶する事となるだろう。

更に言うと空冷エンジンを採用している為、そのようなトロトロとした運転を繰り返すと、バイクが壊れるのでは無いかと思う程に熱が籠る。

バイクが大丈夫だったとしても、股間で眠るまだ見ぬ子孫は絶滅するに違いない。

また、身体が強ばるようなポジションの為か、ターンインは鋭いが妙に引っかかりがありスムーズとは言えない。

つまり、上体から力を抜いて自然に身を任せてバイクを曲げて行く、セルフステアと呼ばれる日本人が好む基本的な運転法が通用しないのだ。

とにかく、変としか言いようが無いバイクである事は確かだった。

「そこまで言うんやったら信じてあげても良いけど、お父さんもまた難儀なバイクを遺したもんやね。ガラガラ・ガガガッ言う音しとったし壊れてるんちゃうん？」

朝日空がそう言うのも当然である。

あのバイクはアイドリング時には常にガラガラと謎の音が発生していた。

また、クラッチは猛烈に硬くミートポイントが浅くシビアな為、発進時にガガガッと振動と共に不快な音が発生しやすい。

更に失敗してエンストするとエンジンの上下動が大きい為、タンクに股間を突き上げられて悶絶する事となるだろう。

そう、華麗に乗りこなせないダサイ男（の股間）には制裁を、それが伊達男の国イタリアが産んだDucatiMonster900と言うバイクなのである。

「俺も心配になって調べてみたけど、ガラガラはあれで正常なんだってさ！ まぁ...、ガガガッは俺のミスだけどさ...」

「あ、やっぱりお兄ちゃんの運転が下手だからやん！！ もっと、精進せにゃあかんよ！！」

と得意げに双間優斗の頭をポンポン叩く朝日空。

「くっ...、年下の癖に上から目線で言いやがって...！！」

「お兄ちゃんったら、俺の妹がこんなに五月蠅いはず無い思っとるんか？ 残念ながら三次元の妹はこんなもんやで！」

「マジでうっせーよ、馬鹿！」

「馬鹿ちゃうよ！ そこはアホ言う所や！！」

「どっちも変わらないだろ、アホ！！」

「よし、それでOKや！」

そんな様子を見ていた通行人は仲が良い兄妹だとクスクスと笑っていた。

そんなこんだで隣接している神戸モザイクに移動する二人。

神戸モザイクはヨーロッパの町並みを模したショッピングモールで、目的地である映画館はその3階にあった。

その日の上映スケジュールを見ながら何を見るか相談する。

「さて、何見よか？」

「俺は何だって良いからお前決めろよ」

「嫌や！ だって、お兄ちゃん、うちが決めたら後で文句言うに決まってるやろ！！」

「そんな事ない！」

「じゃあ、うち恋愛ものが見たいし、タイタニック3Dにしようか！」

「却下！！」

「ほらあ、やっぱり言うと思ったんや！」

「うぐっ、恋愛ものとか寒イボが出るんだよっ！！ しかも、タイタニックなんて2Dだろうが、3Dだろうがディカプリオが沈むだけだよ！！」

「まあ、キャメロン監督は最新技術だけで内容はスカスカ、そんなにおもろ無いのは事実やしね。なんやねんアバターって、幼稚にも程があるで！！」

「お前...、全国のキャメロンファンに殺されても知らんぞ...。まあ、そんな奇抜な人が居るかどうか定かじゃないけどな！」

「お兄ちゃんも何気に酷い事言うとなあ...。んで、どんなジャンルだったらええの？」

「SF...、ファンタジー...、漫画原作...」

「ぷっ、子供か...！？」

「ち、畜生...、だから言うのやだったんだよお...」

「ほら、アメちゃんあげるから泣かんといてや...！」

「な、泣いてない...！！ だが...、折角だからアメちゃんは頂く...！！」

「そなら、折半で行こか！！」

「折半って何だよ！？」

「これや...！！」

朝日空が指差す先にはテルマエロマエと言う映画のポスターがあった。

白いうさぎ～それは遠き日の思い出～

本編が終わってパラパラと席を立つ人が現れる中。

双間優斗と朝日空は様々な人...、主に爺さんの入浴シーンを映したテルマエロマエらしいスタッフロールを最後まで見続ける。

どんなに膀胱が限界に達して時が進むのが異様に遅く感じられたとしても。

例え何の工夫も無く淡々と名前が表示され続けるだけだったとしても、作った人に敬意を払ってスタッフロールを見終わるまでが映画である。

そして、スクリーンの幕が下がり余韻に浸りながらもトイレへと雪崩れ込むと、心地良い開放感と共に徐々に現実へと引き戻されて行く。

先に用を足し終えた双間優斗は、後から来た朝日空の顔を見るなり話しかけた。

「確かに...、これ以上無いって程に見事な折半だったな...」

まだ、現実に戻り切れていないらしく、双間優斗の声は自分でも驚く程に重かった。

「そやね...、いまいちヒロインの設定に感情移入出来なかったし...、無理にラブコメ要素入れんでも良かった気もするけど折半は折半やったね...」

もっとも、声が重いのは朝日空も一緒であったが。

「お前...、相変わらず辛口だな...」

「とにかく、うちに言える事はただ一つ...！ 温泉に行きたい、ただそれだけや...！！」

「ああ、それには同意せざるを得ないな...！」

二人は目的も無しにヨーロッパの街を模した施設内を歩きながら話す。

「有馬の御所坊って所に男女の敷居が低くなってて、顔合わせながら入れる温泉があるんやけど、今度行こか？ 確か日帰りも出来たはずやしね！」

有馬は日本三大古湯の一つに数えられる有名な温泉郷だ。

神戸の山側に位置し中心地である三宮から車や電車で30分程で行く事が出来る為に、市民にも観光客にも人気の高いスポットである。

また、御所坊は鎌倉時代に開業したと言われる歴史ある温泉宿だ。

昭和初期に建てられた木造三階のレトロ・モダンな趣きの建物や、世にも珍しい男女対面式の混浴が人気である。

「温泉...、混浴...」

「お兄ちゃんのスケベっ！！ 何想像しとるんっ！？」

「いや、お前が言ったんだろ！？」

ふと、太陽通りと呼ばれる2階の通路で立ち止まると、すっかり日が暮れて暗くなっている事に気がついた。

「あら、いつの間に夕暮れやね」

「映画見てると時間感覚が麻痺するよな」

「これからどないする？」

「もちろん、帰るに決まっているだろ？」

「うちは折角来たんやから、もうちょっと見ときたい気もするけどなあ…。ん…。あれはもしやっ…!？」

朝日空は突然、通路の先にある植栽に彩られた広場を見つめる。

「どうした？」

その視線の先…。光の広場と呼ばれる場所には、燕尾服姿の白ウサギの着ぐるみが横を向いて立っていた。

中に入っているのは空のように小柄で細身の女性だと思われる小さな姿に、不釣り合いな程大きな懐中時計を首から下げている。

「ご当地キャラか何かか…？」

「お兄ちゃん知らへんの…!？ あれは白ウサ言うて必要な人の所に出て来て、必要な所に導いてくれる言う噂なんやで…!!」

「って都市伝説かよ…!？ お前ってミーハーなもん好きだよな…」

白ウサは突如として双間優斗の方を振り向く。

その黒々とした小さな瞳が自分を見つめて微笑んだような気がして、双間優斗は何故か胸が高鳴るのを感じた。

そして、白ウサは優斗が自分を見ている事を確認すると、踵を返し岬の先にある観覧車の方角に走り出す。

まるで本物のウサギであるかのようなスピードで、中に人が入っている事が信じ難くなる程の人間離れした身体能力であった。

「…!!」

双間優斗は無意識の内にその白い影の後を追い駆けて走り出した。

「あ、お兄ちゃん、待ってや…!!」

突然の事に置いて行かれる形になった朝日空は、少し遅れて彼の後を必死に追い駆けるが、予想に反して直ぐに追い付く事になる。

双間優斗は神戸モザイクに併設された広場の真ん中で立ち尽くしていた。

「ここはモザイクガーデンやね…」

それは1995年7月に阪神淡路大震災の復興シンボルとして作られた無料の遊園地で、かつては家族連れやカップル達で賑わっていた。

だが、つい先日の2012年の5月6日までに観覧車を除く全てのアトラクションが閉鎖し、現在は工事用フェンスによって囲まれ解体作業が行われている所であった。

「ニュースで閉鎖したって言うってたけど、こうなると寂しいもんやね…」

双間優斗はここに来た事があった。

幼かった彼が家族に連れられて新幹線に乗り、神戸の朝日家に遊びに行った時。

まだ産まれたばかりだった朝日空と、大学教授を休業していた彼女の母親の朝日輝子。

そして、朝日空の姉でイタズラっぽい微笑みでおしゃまな朝日月夜と、不敵な笑顔と自由きままさが魅力の彼女達の父。

大好きだった人達と一緒に。

彼は思い出す。

朝日月夜が高笑いしながら運転するパンダの乗り物に追い掛けられて、泣きながらも必死に逃げ回った事を。

巨大なスーパーマリオの形をした風船型の遊具に入って、バウンドして勢いをつけた彼女にフライングボディプレスを食らった事を。

メリーゴーラウンドの馬車に乗りお姫様になりきった彼女を、不器用な王子様役でエスコートした事を。

その付き添いで白馬に乗っていた叔父が観衆の女の子からの黄色い声に調子に乗ってポールダンスのような曲乗りを披露した事を。

係員や朝日輝子から怒られたばかりか、朝日空からも頭をペチペチ叩かれて可愛い制裁を受けていた事を。

永遠に続けば良いと思えるぐらい幸せな時だった。

別れ際にもう一度来ようと約束したが、その約束は果たされる事は無かった。

1999年7月。

朝日月夜と彼女の父は双間優斗の世界から姿を消した。

双間優斗はそれから神戸に来る度に大好きだった二人の姿を探し続けたが、瞬く間に遠ざかって行く幼い思い出の中にしか見つける事は出来なかった。

あとは黒い額縁に飾られた写真にその姿を残すのみである。

そして、彼は思った。

自分の世界は既に終わってしまったのだと。

決して忘れる事の出来ない思い出と約束を抱きながら、終わってしまった世界を永遠と生き続ける。

それがどれだけ彼の心を傷つけ、人生に暗い影を落とすだろうか。

双間優斗は工事用フェンスに囲まれ解体されて行くメリーゴーラウンドのシルエットを眺める。

多くの人達で賑わっていた思い出の場所も今は見る影も無く、多くのモノを置き去りにしながらも時は無情にも過ぎ去って行く。

双間優斗は自分が今にも泣きだしそうな顔をしている事に気付いていなかった。

「そうだ、どうせやったら営業してる観覧車乗らん...？」

そんな彼の顔を見て意を決したように言う朝日空。

「面倒くさい...、お前一人で行って来いよ...」

「ほら、そう言わず一緒に行こか！！」

朝日空は手に取った双間優斗の腕を抱き締めるように抱え込んで、彼を無理矢理観覧車へと連れ込んだ。

終わった人生～それは心を閉ざして生きる事～

闇色の海の水面に変幻自在に色が変化し続ける最新のLED照明によって彩られた観覧車のシルエットが写り込む。

それは元々は六甲ランドAOIAと言う世界最大のウォータースライダーで有名な遊園地にあったものだ。

しかし、1995年1月17日の阪神淡路大震災で壊滅的ダメージを受け営業再開をする事が出来ず、モザイクガーデンに移設される事となったと言う経緯を持つ。

双間優斗と二人を乗せた観覧車は高度を上げて行く。

西にはレインボーカラーのライトアップにより時報を知らせる明石海峡大橋。

東には燃え上がるような強い光に包まれた大阪の街。

南には何処までも続くような闇。

そして、北には闇に包まれた六甲山の頂きに向かって淡い光の粒子が煌めく神戸の街が見える。

「綺麗やねー」

「そうだな...」

しかし、幾ら外の世界が光り輝き美しいものだったとしても、闇の底に深く沈んだ双間優斗の心に響く事は無かった。

「ちょっと、お兄ちゃんったら、女の子とデートして楽しく無いん？」

「まあ、相手が妹みたいなもんだしな...」

双間優斗は上の空と言った調子で答えた。

朝日空は彼が自分の人生を蔑ろにするようになった原因を母である輝子から聴いていた。

そして、思い出のある神戸モザイクで彼が好きな映画を見れば、少しは元気が出るかも知れないと共通映画券を渡されていたのだ。

始めは口では文句を言いながらも楽しんでいたと思う。

だが、白ウサを追いつめて閉鎖されたモザイクガーデンを目の当たりにして以来、今迄以上に心に殻を作るようになってしまった。

きっと、自分達のした事が裏目に出て余計に彼を傷つけてしまったのだろう。

遠くを見続ける彼の表情が辛いのを必死で隠しているように見えて可哀想でならなかった。

「うちの事を妹やって思ってくれてありがと...、乙女心的には複雑だけど嬉しいわ...」

その声は涙に震えていた。

「でもな...、家族やったら...、これ以上辛いのを我慢して隠さなくても良いんやで...」

ううん...、うちだけやない...、お母さんや楽さんだってそう...。

みんな...、お兄ちゃんを心配しとるし...、力に成りたいって思ってくれとるよ...。

だからこれから...、みんなで一緒に力を合わせて...、今を楽しく生きて行けるように成れたら良いって...、そう思うんや...」

次から次へと零れ出る涙を堪える事が出来ず嗚咽に塗れながら言う。

その真っ直ぐな優しさは双間優斗の心に響き、喉の所まで出掛かった感情が溢れそうになりゴンドラの天上を仰ぎ見る。

そう成れたら良いと思う。

心を開いて人と共に生きて行く生き方に、嫉妬しながらも憧れすら感じている。

脳裏に過るのは大学で楽しそうなキャンパスライフを送る他の生徒達...、あんな風に自分の人生を楽しめたらと思う。

宮城楽に心を開いて本当の友達になってツーリングに行けたらと夢を見る。

朝日空に心を開いて本当の家族になって有馬の温泉に行けたらと夢を見る。

だが、それは何時か終わる幻想に過ぎない。

どんなに人を好きになったとしても、どんなに人生を楽しく生きたとしても、何時かは必ず終わりが来る。

失った時に深い傷を追う。

それに、心を開いても否定されるか、相手を傷つけてしまうだけだ。

人を気遣う優しさを持っている人間でも、他人の現実と向き合える覚悟と強さを持っているとは限らないから。

それは同じ事が繰り返される人生の中で解った事であった。

だから、双間優斗は深く心を閉ざす、これからも閉ざし続けると強く誓う。

「何を...、勘違いしているやら...。俺は生きてるのが面倒なだけで、別に辛くもなんとも無いのに...」

しかし、動揺は隠し切れず、その声は霞んでいた。

「嘘つき...、うち...、知ってるんやで...！」

「冗談キツイな...。お前が俺の...、何を知っているって言うんだよ...？」

「お兄ちゃんがどれだけお父さんとお姉ちゃんが好きだったか...！」

朝日空は真摯な視線を向けながら言う。

「...」

凶星を突かれて視線を落とす双間優斗。

「それが、どれだけ辛いのかも解る...」

「...」

「でもな...、二人はもう居ないんやで...！」

何時までも過去に捕われて未来を台無しにしないで...、もっと今を...、うちらを見てや...！！

お兄ちゃんは今を生きている人間なんやから...！！」

「解る...、ものか...」

双間優斗は絞り出すように言う。

「お兄...、ちゃん...？」

「大切な思い出がある事がどんなに辛い事か本当に解るものかよ...！！」

その口調は強かった。

「幸せな誰かが人生を謳歌するのを眺めながら、終わってしまった人生を生き続ける事がどんな

に虚しいか解るか...！？」

そんな事、彼女に言っても仕方無い。

「十年以上も毎晩夢に見る事が...。

あり得るはずも無い再開を夢見て...、思い出の場所で過ごす事がどんな気持ちか解るかよ...！！」

それは解ってはいたが、一度溢れ出した思いを止める事が出来なかった。

「お前は覚えていないから...、そんな事言えるんだ...！」

「お兄ちゃん...。うち...、うち...」

しかし、大粒の涙を流し嗚咽する朝日空を見て我に返る。

心を閉ざし続けると決めたのに、またしても同じ事の繰り返しだ。

罪悪感から胸が痛くてたまらなかった。

「すまん...。お前には非が無いのに...、酷い事を言って傷つけてしまった...」

「ちゃう...、お兄ちゃんが悪いんとちゃうのに...」

双間優斗は謝って済むような問題では無いと自分で解っていたが、それ以上に出来る事が無かった。

「もう、やめにしよう...。これ以上お前を傷つたく無い...」

その言葉を聴いて朝日空は声を出して泣いた。

観覧車が地上に着くまでの時間がやけに遅く、一生分に匹敵する程に長く感じられた。

しかも、地上に着いても終わりでは無い。

気まズくなれば別れて終わりの赤の他人とは違って、彼女とは同じ家に帰って今後も一緒に生活しなければならない。

この重い空気が永遠に続くと思うと憂鬱でたまらなかった。

だったら、どうすれば良い？

彼女の言う通りに過去に捕われずに今を生きれば良いのか？

それは無理だ。

人はそう簡単には変わりはない。

どんなに自分に嫌気が差していたとしても、他の誰かのように生きる事など出来はしないんだから。

邂逅～それは異世界の住民との出会い～

二人は観覧車から降り立つと周囲の様子がおかしい事に気がついた。

普通だったらいるはずの乗降をサポートする係員の姿が無く、観覧車を並んで待っている利用客も無かった。

どうやら、Brahmo Samajと筆記体で書かれた帽子とスタッフジャンバーを着用した男女の集団によって広場が封鎖されているようだった。

ただならない空気を感じた朝日空は俯きながらも双間優斗の腕に縋り付く。

だが、不安なのは彼も同じでその身体から汗が吹き出していた。

「そっちの子がNo.18『月』の大アルカナかー！」

その緊張を関西なまりで軽い雰囲気の声が破る。

「150cm程の小柄で細身ながら身体能力に優れた十代女性で、奇抜なファッションを好むって情報だったけど、普通の格好してれば意外にも可愛い子だなあー！」

二人の進路を塞ぐように現れたのはカールした短髪が特徴的な青年...、双間優斗と同じ大学に通うリア充で有名な近江奏矢だった。

相も変わらず四人の女子を引き連れている彼は、ニヤリと笑いながら朝日空を見る。

双間優斗は怯える空を庇うように前に出る。

「邪魔だからそこを退いてくれないか...？」

「そうはいかないぜー、わざわざネットで対戦申し込みして、施設を閉鎖してまで戦いの舞台を整えたんだからなあー！！」

「はあ、戦いだって...？」

近江奏矢は手にしたスマートフォンの画面を見ながら言う。

「そうそう、うちの大学の朝日教授の関係者の可能性があるって情報もあるけどー、そこら辺どうなんだ！？」

その名前が出て来て双間優斗と朝日空の二人は動揺を隠せない。

「その反応は間違い無いて事を証明してるようなもんだぜー！？」

「だから、何の事だよ？」

「んでー、そこの何処かで見た事ある彼氏は配下の小アルカナって所か！？」

「話を聴かない奴だ...」

近江奏矢は双間優斗を無視しつつも話を進める。

「俺は近江奏矢、No.4『皇帝』の大アルカナって言えば解るだろー！？」

彼はNo.4『皇帝』の絵柄が描かれたタロットカードを見せつける。

「そして、こっちの四人は俺の配下の小アルカナ...、No.4のクラブ、ハート、スペード、ダイヤのフォーカード・ガールズだぜー！！」

後ろに控えたイケイケなファッションの四人の女性が、それぞれが手にしたNo.4のトランプのカードを見せた。

「で、そっちの彼氏は何のアルカナー？」

「は...？」

「はんっ、名乗る程の者でも無いって事かい。良いぜー、面倒抜きにして始めようぜー！！」

近江奏矢は朝日空の方に向かって一直線に駆け寄ろうとするが、双間優斗は眉間に皺を寄せて彼女を庇おうとする。

「なんだか知らないが、空に危害は加えさせはしない！！」

「こっちこそ、奏くんの邪魔はさせないわよ！！ 食らえっ！！」

先ほどクラブの4のトランプを見せつけた女性が、双間優斗に向かって掌を突き出した。

その無意味な行為に言い知れぬ危機感を覚え、突き出された掌の直線上から朝日空の身体を抱いて身を反らした次の瞬間だった。

二人の身を焦がすような炎が迸った。

「なん...だと...？」

「熱い...！！」

まるで魔法...、いや超能力バトルものである。

にわかには信じ難い光景であったが、現実目にしている以上は対処するしかない。

「よくかわしたじゃない？ 冴えない顔でも流石に選ばれた戦士ってわけね！！ でも、これはどうかしら！？」

スペードの4の女性が大地に拳を突き立てると、隆起して剣山のようになったアスファルトが迫り来る。

当たれば股間から脳天まで串刺しだろうが、比較的ゆっくりした速度の為、朝日空を抱えたままでも避けるのは容易であった。

しかし、避けた所で何か身の毛のよだつような物を感じ咄嗟に空の身体を突き出す。

「お兄ちゃん...！！」

朝日空の悲鳴が響く。

次の瞬間、鮮血が飛び散った。

ハートの4を持った女性が指先から高压のウォーターカッターを噴出し、双間優斗の左肩を貫通したのだ。

「ぐお————っ！！」

双間優斗は今迄経験した事が無い程の燃えるような痛み、呼吸すらままならず止めどなく血が溢れ出す患部を押さえて蹲るしか出来なかった。

「あら、貴方のハートを射抜いてあげるつもりだったのに少し外してしまったわね」

確かに心臓を撃抜かれていたら即死だっただろう。

しかし、致命傷を受けた事には変わらなく、このまま治療を受けなければ失血多量で死ぬ事は間違い無いだろう。

「止めは私がさしてあげるんだから！」

スペードの4の女性はその腕を下から上へと振るうと、まるで小規模な竜巻のような局地的な暴風が双間優斗を襲う。

それは彼の身体を滅茶苦茶に引き裂きながら空高く舞い上げる。

「アカンっ...！！」

朝日空が声を出した次の瞬間だった。

まるでスローモーションを見ているかのように、ボロボロになった双間優斗の身体が自由落下し、ポテツと言う湿った鈍い音と共に地面に叩き付けられた。

硬いアスファルトの上でうつ伏せになった彼の周囲に、絶望を感じさせる赤い液体が広がっていく。

その姿は力無くグロテスクな人形のように思えた。

「ああっ、血がっ...！！ 血があないにっ...！！」

朝日空は慌てて双間優斗に駆け寄ると、意識を失っているものの呼吸と脈はあった。

彼女は自分の衣服を破ると、特に出血の酷い貫かれた肩の傷と、地面に叩き付けられた額の傷を縛って止血する。

しかし、あっという間に衣服が赤く染まって行き、朝日空は言い知れぬ恐怖を感じる。

「どうだい、俺達の力はさー！？」

その様子を見て近江奏矢と四人の女性達が嘲笑う。

「四大元素を現す4の数字の小アルカナを持つ彼女達は、それぞれのシンボルに対応した属性攻撃をする事が出来るんだぜー！！」

「そんな事知るか...！！ なんで、こんなにも簡単に人を傷つけて、楽しそうに笑う事が出来るんや...！？」

「おいおい、今更何言っちゃってるのー！？ より強い力を持つ者が、力を持たざる弱い者を叩く...、それが戦いってもんだろお！？」

若くして特殊な能力を持ったばかりに、自分が傷つけられるとは夢にも思っていないから、人の痛みを理解する事が出来ないのだろうか？

「許さへん...」

朝日空は怒る。

誰よりも優しい気持ちの持ち主である故に、身勝手な行為によって大切な人を傷つけた彼らに対し激しい怒りを抱く。

「そんな下らない理由でお兄ちゃんを傷つけたあんたらは絶対に許さへんっ...！！」

応急処置を終えた空は眉間に皺を寄せ近江奏矢に向かって突進する。

「許さないからって何なの？」

その進路を遮るようにスペードの4の女性が立ち塞がり、その腕を一文字に振るって横向きの突風を発生させる。

「あんたらの攻撃は見切ったで...！！」

朝日空はその攻撃に向かって全力疾走すると、足を先端にして地面を滑り込みスライディングによってかわす。

そして、突然の事に無防備な姿を晒したスペードの4の女性の顎に向けて、全身のバネを使った渾身のアップercutを食らわした。

「これはお兄ちゃんの仇やっ...！！」

しかし、クリーンヒットとは行かなかった。

彼女達の使う超能力によって生み出されたと考えられる不可視の壁に遮られた感触があったのだ。

「ぐうっ...！！」

だが、完全にダメージを無効化出来るわけでは無いようで、スペードの4の女性は涙目になりながら顎を押さえて蹲る。

「女の子の顔を狙うなんて最低...！！」

「最低なのはどっちや...！？」

ダイヤの4が地面に拳を突き付け地面を隆起させる攻撃を繰り返す。

「だから言ったやろ、見切ったって...！！」

だが、朝日空はそれを難なくかわしつつ、動揺したダイヤの4の女性の股間に鋭い膝蹴りを放つ。

「ああんっ...！！」

股間を押さえて崩れ落ちるダイヤの4の女性。

小学校、中学校と男子に混じって様々なスポーツを嗜んで数々の痛みを経験して来た朝日空は、女性であってもその場所への打撃が有効である事を身を持って知っていた。

朝日空は次から次へと敵を倒しつつもハートの4の女性の指先に警戒しており、間髪入れずに打ち出されたウォーターカッターをも避けてみせる。

「な、なんで、私達の攻撃が...！！」

「指向性が強いバレーやん...！？ そんなのうちには効かへんよ...！！」

そして、ハートの4の女性の鼻っ面に猛烈なストレートを叩き込んだ。

「ほんの少しで良い...、人の痛みを知って欲しい...！！」

それは彼女達が何らかの手段でダメージを軽減している事を知っているからこそその本気の一撃であった。

ハートの4の女性は勢い良くすっ飛ばされた。

「はっ、なかなかやるじゃないの！！ だがっ、それだけじゃ俺には敵わないぜー！！」

そう言うと近江奏矢はその掌の上に炎を浮かべる。

「なんや...、あんたも他の四人と同じ能力か...？」

「そっ、だけど大アルカナである俺は四属性の全てを一人で扱えるんだぜえー！！ そして、同じ属性同士を掛け合わせると、どーなるかって言うとおー！！」

「行くよ、奏くんっ！！」

「ほい来たっー！！」

近江奏矢はクラブの4の女性が放った炎に、自らが放った炎をぶつける。

その瞬間、炎が累乗されて一気に膨れ上がった。

もはや指向性なんてものは無い。

本来開かれた空間ではあり得ないバックドラフト現象を思わせるそれは、茫然自失となって立ち尽くしていた朝日空の小さな身体を飲み込もうとする。

「くっ、駄目や...！！　こんなの避けられへん...！！」

しかし。

「うお—————っ！！！！」

雄叫びと共に朝日空の身体は誰かに抱えられながら押し出され、肌を焼き、鼓膜を振るわせるような大爆発から間一髪逃れる。

その爆風によって誰かと抱き合いながら地面をコロコロと転がる朝日空。

「お兄ちゃん...、気がついたん...！？」

「あたり...、まえだろ...！？」

そう言うものの、双間優斗の血に塗れた身体は震えていた。

怪我による痛みや失血多量のダメージも大きかったが、それ以上に命の危機を実感した恐怖による精神的ダメージは大きかった。

朝日空を守ると言う大義名分が無ければ、糞尿を漏らして反吐を吐いた挙げ句に、気絶しててもおかしくは無い。

正直言って今の攻撃を避ける事が出来たのは奇蹟に近かった。

朝日空もまた転がった拍子に肋を痛めたようで、息をするのも苦しそうに胸を押さえている。

「はんっ、そんな様子じゃ、次の攻撃は避けられないぜえー！！」

凶星だった。

近江奏矢とクラブの4の女性は互いの掌に炎の塊を発生させる。

次にあの巨大な炎の攻撃が放たれば、双間優斗は朝日空と共に焼き尽されるだろう。

「仕方無いか...」

双間優斗はそう呟くと朝日空の身体を再び突き放す。

「えっ...！？」

「うお—————っ！！！！」

そして、大声を出しながら近江奏矢とクラブの4に向かって突進する。

威力が累乗する前に二つの炎を食らい、自分の身を盾にして朝日空を守るつもりだった。

「アホォ...！！　何するつもりや...！？」

もちろん死ぬのは怖い。

だが、好きだった人が居なくなったこの世界。

もはや絶望しかない終わってしまった人生を、空の優しい心を傷つけてまで生き続けて、一体何の意味があるって言うんだ？

そう、何の意味も無い。

辛い思いをしながら無意味な毎日を過ごし続ける方がよっぽど怖い。

空には悲しい思いをさせるかも知れない。

だが、彼女を助ける為に死ぬるなら、少しは意味がある人生と言えるかも知れない。

「さようなら、空...」

眼前に二つの炎が迫って来る。

激しい熱で喉と肌がジリジリ焼ける、瞼を閉じていても目が渇く。

「お兄ちゃーん！！」

戦場に朝日空の悲痛な叫びが響く。

だが。

「自分の人生を投げ出すとは腰抜けも良い所ですわ。それは大切な人を何よりも傷つける最低・最悪の暴力行為ですわよ！！」

何かが疾風のように戦場を横切ったかと思うと、迫り来る炎を鋭い銀閃が打ち消す。

そこに居たのはフリルの付いた黒いドレスに身を包み、柔らかく広がったスカートのスリットから日本刀を抜き出した小柄な少女のシルエットだった。

側頭部から伸びる二房の長い銀髪が夜風になびく。

「ですが、今の今まで、本当によく頑張りましたわね。それだけは褒めてさしあげますわよ」

彼女は刀剣を思わせる切れ長の瞳を細めて微笑んだ。

「お、お前は...？」

双間優斗は何故だか涙が止まらなくなった。

「誰や...？」

彼の元に駆けつけた朝日空の大きな瞳からも不思議と涙が溢れていた。

「私は香夜姫...、No.18『月』のアルカナですわ...！」

彼女は双間優斗と朝日空を庇うように近江奏矢の間に立つ。

「戦いの邪魔ですから下がって下さいな」

「ほう、その奇抜なファッション！！ こっちの子が本物ってわけねっ！！」

「あら、華麗なファッションと言って下さいな」

近江奏矢がその指先を突き出すのとほぼ同時だった。

ゴスロリ衣装の少女...、香夜姫は身を捻りながら駆け出すと、その脇をウォーターカッターが霞めて行く。

「な、速いっ！！」

「貴方がトロイだけですわ」

その格好からは俄に信じ難い程のスピードで間合いを詰める香夜姫。

危機感を感じた近江奏矢は慌てて拳を大地に突き立てる。

剣山のように隆起した地面が襲いかかるが、香夜姫はその攻撃に向かって特攻する。

「きゃっ、アカン...！！」

空が悲鳴を上げる。

そう、誰もが串刺しになった惨たらしい姿を想像した。

だが、香夜姫は何処から剣山が隆起するか知っているようで、まるでダンスのような華麗なステップで僅かな攻撃の合間を縫って最短距離で間合いを詰めて行く。

それは最早、反射神経が優れているからと言って出来る芸当では無かった。

「ふふっ、わたくし感が良いんですよ」

「まさか、予知能力ってかっー！？」

近江奏矢が言う通り予知能力があると思えない程であった。

「さて、どうでしょうかね？」

「このっ、予知なんだか知らないけど、奏くんに近づくのは許さないんだから！！」

クラブの4の女性が香夜姫に向かって連続で炎を放つが、香夜姫は手にした日本刀で次から次へと斬りつけてそれを打ち消しながら前進する。

「あら、許して下さらなくても結構ですわよ。わたくし他人から恨みを買うのは馴れてますから」

灼熱の炎が飛び交う中で涼しい微笑みを崩さない香夜姫に、敵対する近江奏矢とクラブの4の女性は言い知れぬ恐怖を感じる。

「はんっ、これならどうだー！！」

近江奏矢はタイミングを合わせて炎を放ち、クラブの4の女性の炎の威力を増幅しようとする。

しかし、香夜姫は炎が膨れ上がる前に一閃して打ち消す。

「どんなに強力な攻撃であっても、当たらなければどうと言う事はありませんわ」

「くそーっ！！」

至近距離まで間合いを詰め寄られた近江奏矢は苦し紛れに腕を横に振るうが、香夜姫はそれと同時に人間離れしたスピードで高く跳躍していた。

彼女の下を横向きの突風が通過する。

「チェックメイトですわ！」

そして、近江奏矢の頭に縦一文字の斬撃を叩き込む。

その一撃は彼の身体を覆う何かとぶつかり合い激しく火花を散らす。

「ぐふっ、いてえーなあー！！」

「奏くんっ！！」

クラブの4の女性が悲鳴を上げる。

「だがなあ、お嬢さん！！ アルカナの手札を持ってる奴あ、潜在能力を発動しやすくする為の自我領域によってダメージを緩和出来るって、忘れちゃいけないぜー！！」

「ふふふっ、当然忘れてはいませんわよ。ですが、自我領域は心の力、ダメージを受ければ精神が疲労して行く。ならば限界まで斬り続ければ良いだけですわ！！」

斬る！

斬る！

斬る！

香夜姫は目にも止まらないスピードで、その全身に斬撃を放ち続ける。

「いてえー！ いてえー！！ いてえーよおー！！」

「あらあら、ゾクゾクするような良い鳴き声ですね」

「このおー！！」

苦し紛れに近江奏矢が香夜姫の目玉に向かって指を突き出し、その脳天に直接ウォーターカッターを発射しようとする。

「淑女に向かって指差してはいけませんわよ」

だが、香夜姫はそれを掴んで曲がっては行けない方向に捻る。

「ぐがあっ！！」

「よくもそんな酷い事を出来るわね！！」

「ふふふっ、本当に酷い事をするのはどっちの方でしょうかね？」

近江奏矢を助ける為にクラブの4の女性は炎を放つが、香夜姫は彼の身体を盾にしてその攻撃を防ぐ。

「きゃー！！ 奏くんっ！！」

「ぐおー——っ！！」

仲間の発した炎にその身を焼かれた近江奏矢は膝をつく。

「いい格好ですわね」

その様子を見てクスクスと笑う香夜姫。

「香夜姫...、なんて奴だ...」

その圧倒的な戦闘能力と異常な精神性に魅せられて呆然とする双間優斗。

「強い力で人を傷つけて喜ぶなんて...、そんなんアイツらと変わらんやないの...！」

朝日空は香夜姫を見て不快感を露わにする。

「ぐふっ、この俺がここまで追いつめられるとはなあ。だがしかあし、こうなったら奥の手を使うまでだぜえー！！」

近江奏矢の合図を受けて、クラブに加えてダメージから復活したハート、スペード、ダイヤの計4人の4番のカードを持つ女性達が広場の四隅を囲う。

「アイツら、何時の間に復活したんか...！？」

朝日空が驚愕の声を上げる。

そして、彼女達の囲う広場の中央に近江奏矢が立つ。

「四属性を持つ四人が四隅から能力を使って囲い込み、四属性の全てを一人で扱える俺がそれを増幅したらどうなるか解るかなっー！？」

「教えてー！！」

女性四人が間の手を入れる。

「そう、まさしく東西南北天上天下一！！ 予知なんて関係無い完全無敵全方位攻撃の完成だぜー！！」

それに気を良くした近江奏矢は意気揚々と答える。

「もちろん、部外者を巻き込もうとも手加減なんてしないわよ！ 散々コケにしてくれた恨みを晴らしてやるんだから！！」

スペードの4の女性が双間優斗と朝日空の二人を見る。

「クソガキの腐れた股間を私の剣山でグチャグチャにしてやる！！」

ダイヤの4の女性に至っては舌をダラッと垂らして正気とは思えない視線を朝日空の下腹部に向けた。

「そんなん...、逆恨みやないのっ...！！」

強く言いつつも震えながら股間を押さえる朝日空。

「今度こそ貴方のハートを射抜いてア・ゲ・ル！」

ハートの4の女性が傷だらけになって震える双間優斗を見て残忍に笑う。

「ぐっ...」

ただでさえ失血多量と痛みで意識を失いそうなので、攻撃を避ける事すらままならないし、これ以上戦いが長引いたら本当に死にかねない。

「お兄ちゃん...」

朝日空は苦悶の表情を浮かべる双間優斗を心配する。

「ふふっ、確かにこれは少々厄介ですわね」

香夜姫は周囲の状況を見渡して苦笑する。

彼女一人であれば五人の敵を相手にしても余裕で勝てる自信があった。

しかし、ただ気が強いだけで非戦闘員である朝日空と、大怪我を負ったヘタレの双間優斗の二人を庇いながら戦うのは難しいだろう。

「こうなったら、わたくしも奥の手を使わざるをえませんわ」

「なっ...!？」

香夜姫は目にも止まらないスピードで双間優斗の元へ駆け寄ると、刹那的にその身体を抱き締め唇を奪った。

突然の事に茫然自失となる双間優斗。

「い、いきなり何しとん...!？」

朝日空は目の前で双間優斗と重なり合った香夜姫を突き飛ばそうとするが、彼女はニヤリと笑うと軽々身をかわす。

「あら、貴女はこの殿方の恋人で御座いましたの？」

「ふえっ...!？」

朝日空は思わず顔を真っ赤にする。

香夜姫は彼女の双間優斗への気持ちを察した上で挑発的な行為をしている。

近江奏矢や四人の女性達は人の気持ちを考えていない故に身勝手な行為をするが、彼らと比べてあまりにも質が悪い。

「それにしても、こんな時にする事や無いやろっ...!？」

朝日空が声を張り上げて抗議しようとした時だった。

ピシッと言う音と共に空気が張り詰め、その場にいる全員が思わず息を飲んだ。

それが何かは解らない。

まるで心霊スポットへと入り込んだような悪寒が周囲を包んだかと思うと、時空を切り裂く青い稲妻が双間優斗に降り注ぐ。

「ぬわーーーーっ!!」

双間優斗は心を焼き付くさんとする青い業火に飲まれ、魂の底から叫び声を上げながら意識の海へと深く沈んで行く。

生気無く項垂れるその姿は、まるで生きる屍のようであった。

「アンタ、お兄ちゃんに何をしたんっ...!？」

朝日空は得体の知れない雰囲気には怯えて内股になりながらも、怒りを勇気に変えて香夜姫の胸

ぐらを掴む。

「あらあら、心配しなくても異なる世界の住民を憑依させただけですわよ」

しかし、香夜姫はあくまで平然とした様子を崩さない。

「何...、言うとなんの...!？」

あまりの意味不明さに朝日空は思わず掴んだ胸ぐらを放す。

「はあー!? お嬢さんの能力は予知じゃなかったのー!？」

しかし、一番唾然としていたのは自分の予想を外された近江奏矢であった。

「ふふふっ、異世界にアクセスする能力...、と言ってもお馬鹿な貴方達にはお解りに成りませんでしょうね」

そんな彼を嘲笑うかのような態度を示す香夜姫。

「なん...、だと...!？」

そして。

「ふふふふふふっ...」

双間優斗は突然小さく笑い自ら沈黙を破る。

「お兄...ちゃん...!？」

その口元が三日月型に歪む。

まるでビデオを逆再生するかのように音も無く切り裂かれていた肌の傷が綺麗に消え、ボロ布と化していた服がみるみる内に復元されていく。

「ハーハッハッハッ...!!!」

血で染められていた額や肩口の当て布を天高く投げ捨てると、傷はおろか血の跡も残っていなかった。

「この世界よっ!!! ボクは戻って来たぞっ!!!! 戻って来たんだあ————!!!!!!!」

冷たい瞳が鋭く光る。

「あら、それはよろしゅうございますわね」

突如として豹変して再生能力を発揮した双間優斗に、朝日空も近江奏矢達も驚きを隠せないでいたが、香夜姫だけは一人冷めた様子であった。

「おっ...?」

双間優斗は香夜姫と朝日空の顔を見渡して微笑む。

「ですが、それは借物の身体に過ぎませんから、用事が済んだら速やかに返して頂きますわよ」

「ふっ、相変わらず連れなないな、我が愛しの姫君は」

双間優斗は香夜姫の肩を抱き愛おしげに頬を寄せながら、彼女の薄い胸を嫌らしい手つきで撫で回す。

「貴方のすべき事は解ってますわよね...?」

香夜姫は露骨に嫌な顔をしながら双間優斗を引き離し睨みを効かす。

「ああ、あのアルカナ達を倒せば良いんだろ?」

口元を不敵に歪ませながら舌舐めずりをする双間優斗。

「さあて、借物の身体とは言えこの世界に来られたんだ、少しぐらいは楽しませてもらうとするかな...!？」

双間優斗の強い殺意を感じさせる残忍な視線に、近江奏矢は思わず背筋を凍らせた。

「お前はっ...、お前は一体何なんだよおー!？」

「ボクかい...? ボクはソーマ...! No.19『太陽』の大アルカナのソーマさ...!!」

双間優斗がソーマと名乗るのを聴いて朝日空は驚いたように目を見開いた。

「な、No.19って永久欠番じゃ無いのかよっ!？ まさかお前が1999年の前回大会の覇者、神に至った男だっただのかっー!？」

近江奏矢もそれを聴いて驚きを露わにする。

「ふっ、それは自分の身で確かめれば良いさ!!」

ソーマは冷たく瞳を輝かせる。

「ここはボク一人でやる。姫はこの子を守ってやってくれ」

「了解ですの」

香夜姫が朝日空を連れてソーマと近江奏矢のいる中心部から離れる。

とは言っても四隅を囲う四人の女性の射程距離内ではあるが、香夜姫の能力を持ってすれば十分危険を回避する事が出来るだろう。

「お兄ちゃん...」

朝日空が心配そうに呟いた。

香夜姫と朝日空の様子を確認するとソーマは近江奏矢を挑発する。

「さあて、さっさと始めようか？」

「くっ、先手必勝だぜっ!! どんな相手だろうが俺達の力の前には敵わないと教えてやるまでだっー!!」

近江奏矢はダイヤの4の女性に視線を配ると、大地に拳を突き立てて地面を隆起させる。

そして、ほぼ同時にダイヤの4の女性が発した同様の攻撃と合わさり、広範囲に渡る針山となってソーマを襲う。

次の瞬間、朱色の血肉が飛び散る。

ソーマは全身を串刺しにされながら、隆起した大地に飲み込まれた。

「おらよっ!! 念には念を入れてとどめだー!!」

息を付く間も無い。

近江奏矢は指先からウォーターカッターを発射し、ハートの4の女性がタイミングを合わせて同様の攻撃を放つ。

大規模に威力を増した攻撃は全てを粉碎しながらも押し流す津波のようであった。

それはソーマを飲み込んでいた隆起物を跡形もなく打ち砕く。

能力によって作り出された津波が不自然に消滅すると、そこに残っていたものは見るも無残なソーマの姿だった。

全身を串刺しにされ原型を留めない程に押しつぶされた肉塊となり、到底生きているとは思えなかった。

左腕は胴体から切り離され少し離れた場所に転がっている。

「ああっ...！！ お兄ちゃんがっ...！！ お兄ちゃんが死んじゃう...！！」

それを見ていた朝日空が悲鳴をあげた。

「ふふっ、何も心配する必要はありませんことよ。あの方がNo.19『太陽』の大アルカナの名乗ったのは伊達じゃありませんから」

香夜姫は泣きじゃくる朝日空を嘲笑うように言う。

「貴女はただ愛しい人の帰還を信じて待っていれば良いんですの」

香夜姫の言葉を証明するようにソーマが立ち上がると、何事も無かったかのように元の姿へと復元されて行く。

「やれやれ、酷い目に合ったよ。威力だけはとんでも無いものがあるね」

そして、切断された左腕を拾い上げ元の場所に接合するとニヤリと笑う。

「だが...、その程度じゃボクを殺せはしないさ！」

「ちっ、やっぱり再生能力って奴の持ち主ってワケか！！」

近江奏矢は舌打ちする。

「ふっ、そんな事で驚いてもらっちゃ困るな。何せそれはボクの能力の片鱗に過ぎないからね！！」

「はんっ、お前がどんな能力であろうともルールは平等かつ無情だぜー！！ なにせ気絶させるか即死させれば良いだけだからなあー！！」

「だったら、ボクの能力の真骨頂を見せてあげるよ！！」

近江奏矢とスペードの4の女性がタイミングを合わせて発生させた巨大な竜巻がソーマへと迫り来る。

だが、ソーマは不敵にその口を歪ませた。

次の瞬間、ソーマの身体は巨大な竜巻に飲まれ、激しくきりもみしながら宙へと持ち上げられる。

「よっしゃー！！ このまま地面に叩きつければ、幾ら再生能力があっても即死決定だぜー！！」

本来だったら全身を風圧によってバラバラにされながらも空高く飛ばされる所だ。

「ふっ、甘いな君は...！！ 甘過ぎて食べてしまいたいぐらいだよ...！！」

しかし、ソーマは風に乗って竜巻の外周部を周回する。

「そ、そんな馬鹿なっ！！ 漫画みたいな事が現実に来るはずがっ！！」

近江奏矢がそう言うのも無理は無い。

風に乗るソーマの姿はまるでサーフィンでもしているかのように華麗であった。

「それが出来るのさ！！ そう、ボクの能力ならね！！」

そして、ソーマは竜巻によって勢いをつけて飛び出すと、啞然としている近江奏矢に向かって突進した。

ソーマの拳が近江奏矢の腹に食い込む。

「ぐおーーー！！」

渾身の一撃を食らって血反吐を吐く近江奏矢。

「あれ、こんなシーン、それこそ昔の漫画にあったよね？」

ソーマは血反吐を避けるように身を捻ると、そのまま近江奏矢の脇腹に向かって鋭い膝蹴りを放つ。

「でも、あの漫画で貫かれた相手が吐いていたのは卵だったけど...、ねっ、ピッコロさん...？」

そして、バックステップで間合いを開けると、ポケットに手を入れ挑発的に笑う。

「く、くそったれー！！ こうなったらみんなで一斉攻撃をしてやるっ！！」

「でも、それだと奏くんにも当たっちゃうかも！！」

「俺の心配なら無用だつてのっー！！ 火と水、風と土は互いに相殺する事が出来るから、いざとなったら攻撃を打ち消してやるまでだぜー！！」

「おっ、それは良い事を聴いてしまったよ！！」

「はんっ、だからってお前に何が出来るって言うんだー！？」

「それこそ何でもさ！」

ソーマは縦横無尽に駆け回り四方八方から迫り来る攻撃を避け続ける。

そして、偶然にもクラブの4の女性が放った炎による攻撃と、ハートの4の女性が放った水流による攻撃がぶつかり合い、激しい水蒸気を上げて相殺される。

「何っ...！？」

その好機を見逃すソーマでは無かった。

ソーマは大きな隙を見せたハートの4の女性まで一気に駆け寄ると、彼女の細い首筋に手刀を叩き込む。

「ふふっ...、この私を一撃で射止めるとは...、やるじゃないの...」

そう言いながら崩れ落ちる彼女の身体を支えて優しく寝かせるソーマ。

「お褒めに預かり光栄だよ！」

幾らアルカナのカードを持つ者が自我領域と呼ばれる不可視の壁に守られていたとしても、完全にダメージを無効化出来るわけでは無い。

最も有効な個所に攻撃を加えて一撃で意識を奪うのは、まさに前大会の覇者と謳われる百戦錬磨のソーマだからこそ出来る技であった。

しかし、それを好機と捉えていたのはソーマだけでは無かった。

「はんっ、偶然にもこっちの攻撃を相殺したのを利用したようだが、それだったらこっちにも考えがあるぜー！！」

近江奏矢がソーマを後ろから羽交い締めする。

「で、その考えてのはボクを激しく抱き締める事かい？」

「そんな訳あるかっ！！ こっちの攻撃を利用されないように、絶対に相殺されない組み合わせで攻撃してやるって事だよっ！！」

阿吽の呼吸によって近江奏矢の作戦の意図を読み取ったスペードの4と、クラブの4の二人の女性は、それぞれ小規模な竜巻と火球による攻撃を放つ。

近江奏矢に羽交い締めにされたままのソーマに向かって。

「俺はお前を盾にしつつ相対する属性を使って攻撃を回避出来る！！　だがしかあし、お前はどうかだろうなあー！？」

しかし、ソーマは笑う。

「言っただろ、何でも出来るってね...！！」

そう言うと彼は羽交い締めされて身動きが取れない状態で踵を踏み鳴らす。

次の瞬間、偶然にもその小さな振動を切っ掛けにして、度重なる隆起による攻撃で緩んでいた地盤に亀裂が生じた。

「な、なんだごおー！？」

そして、迫り来る小型の竜巻に向かって一直線に亀裂が伸び、小型の竜巻とぶつかり合い気流が乱れ相殺された。

そればかりか、延長線上にいたスペードの4の女性は亀裂に飲まれて、地面と地面の間に挟まれて身動きが取れなくなってしまう。

事実上のリタイヤだ。

続けて飛んで来た火球は亀裂から偶然にも吹き出た高波によって見事に鎮火され、クラブの4の女性はそのまま顔面に重い水の塊を食らい気を失った。

「まさか、念動力だったのかあー！？」

「ふっ、そんなちっぽけな能力だと思われたら心外だな。

そう、あえて言うならば因果律操作能力...！

自分に都合の悪い事象を否定し、自分に都合の良い事象のみを肯定する...、それがボクの力のさ！！」

「そんな、都合の良い能力があるわけがっ...！！」

しかし、狙って出来る事でも無い、それこそ偶然としか言いようが無い事がソーマを助け続けている以上、完全に否定する事は出来なかった。

「それを信じる、信じないかは君次第さ！！」

ソーマは近江奏矢を背負い投げする。

「ぐうー！！」

だが、ただで転ぶ近江奏矢では無かった。

「だが、このままでは終わらんぜえー！！」

黒帯級の見事な受け身を取り態勢を整えながらも、ソーマに向かって指を拳銃のように突き出し、残る全ての力を使った渾身のウォーターカッターを放つ近江奏矢。

まさに必殺技。

威力も大きければ発射されている時間も長かった。

それはソーマの腹を貫通し大穴を開け、そのまま胸へと切り裂いて行く。

血が、肉が、内臓が、ソーマからポトポトと零れ落ちて行く。

「まったく...、酷い事をするよね、君は...」

しかし、ソーマはドバドバと血反吐を履き、顔面蒼白になって今にも息絶えそうな状態の中で残忍な笑みを浮かべる。

「しまっ...!？」

近江双間がソーマの狙いに気付いた時には既に遅かった。

ソーマを貫いたウォーターカッターは背後にいたクラブの4の女性へと猛スピードで迫っていた

。

それは彼女の両足の間に当るとジリジリと射軸を上げて行く。

このままでは股間から脳天まで真っ二つにされてしまうが、大地の隆起による攻撃しか使用する事の出来ない彼女にはそれを相殺する術は無かった。

「ヤダっ!! ヤダヤダぁ!! お股をグチャグチャに切り裂かれるような死に方はヤダぁ!!」

クラブの4の女性の悲痛な叫びが響く。

「ボクとしても女の子が真っ二つにされる姿は見たくは無いさ...!!」

ソーマは不敵に笑いながら指を鳴らす。

次の瞬間だった。

戦いの余波を受けて限界に達していた電線が切断され、仮設電源の燃料に引火して大爆発を起した。

地響きを伴うような激しい爆発によって目と耳の感覚が一瞬失われる。

そして、ダイヤの4の女性の股間を切り裂こうとしていたウォーターカッターは、爆発によって生じた熱風によって水蒸気と化して相殺された。

しかし、ダイヤの4の女性は恐怖から解放された安堵感から、股間を濡らしながら意識を失った

。

「もっとも、女の子の可愛らしい姿なら幾らでも見たい所だけどね...!」

何事も無かったかのように致命傷を復元しながらソーマはニヤリと笑った。

「さあて、残るは君のみだけど、自分からリタイヤするかい？」

対する近江奏矢は全ての力を使い切って憔悴し、能力の発現を補助し身を保護する自我領域も消えかかっている状態であった。

「ちくしょうー!!」

しかし、彼は最後の最後まで戦いを諦めずにソーマに向かって突進する。

「まったく、君達は本当によく頑張ったものだよ。しかし、負ければ何の意味も無い...、それが戦いってものなのさ...!!」

ソーマは近江奏矢の顔面に向かって重い拳を叩き付ける。

そして、勝負は決した。

「こいつはボクがもらっておくよ」

倒れた近江奏矢からNo.4の大アルカナ。

四人の女性からクラブの4、ハートの4、スペードの4、ダイヤの4、四枚の小アルカナのカードを回収するソーマ。

「まったく、もっと手際良く片付ける事も出来たでしょうに...。本当にお遊びの過ぎる戦いでしたわね...」

そこに離れて様子を見ていた香夜姫。

そして、朝日空が駆け寄る。

「お兄ちゃん...！！」

ソーマは改めて朝日空の顔を見て微笑む。

「もしやとは思ったが、やっぱり君は空...、朝日空なんだろう？」

「だから、なんやの...！？」

「はははっ、あんなに小さかったのに、随分と甘酸っぱい果実へと育ったじゃないか...！！」

ソーマは朝日空に抱きつき頬を寄せた。

「いきなりなにをするんっ...！？」

突然の事に頬を染める朝日空。

「でも、まだ青い...！ 食べごろは少し先だね...！！」

そして、ソーマは調子に乗って彼女の身体を舐めるように撫で回す。

「ああっ...！！」

「ふっ、久々のスキンシップだ、少しぐらい堪能させてもらっても良いだろう？」

「正直...、お兄ちゃんに抱き締められて...、嬉しい...。でもな...、うちの好きなお兄ちゃんは...、そんなんちゃうよ...」

朝日空はポツリ、ポツリ喋りながら大粒の涙を流す。

「お兄ちゃんはな...、互いに傷つけ合うのを恐れて...、人を遠ざける...。ヘタレやけど優しい人やったから...」

「...」

「だから、早く元に戻ってや...！！ お兄ちゃん...！！」

そして、朝日空は抱き合った男と唇を重ねた。

次の瞬間、ソーマの意識の底で全てを見ていた双間優斗は、彼の支配に逆らい身体を取り戻そうとする。

空を...、空を泣かせるな...！！ 身体を...、返せ...！！

「ぐっ、身体を持ち主が抵抗しているだと...！？ いや...、これは微弱だけど巫女の力の介入...！？」

そして、僅かに硬直した際にソーマを突き放す朝日空。

「さて、いい加減に元の世界に帰って頂きますわよ。この世界に貴方の存在は既に無いのですから」

香夜姫は双間優斗の額にその白い手を伸ばす。

すると、その身体から青白い業火のようなものが放出されて行く。

「ふふふっ...、ここは引き下がるが、ボクは絶対にこの世界に再び復活するよ...！！ ボクと言う概念は永遠に不滅だからね...！！ はっ、はっはっはっはっ...！！」

そして、自らをソーマと名乗っていた者は高笑いを残しながら消えて行った。

「さて、わたくしもお暇させて頂きますわ」

双間優斗は自分の身体を取り戻したものの、今まで経験した事の無い程の疲労によって意識を

失いつつあった。

「あなた方を巻き込んでしまったのは悪いとは思いますが、わたくしは夢と現実の狭間に生きる亡霊のようなものですから、綺麗さっぱり忘れて元の生活に戻って下さいな」

「ま、待ってくれ...！！ お...、お前は...！！」

背を向ける香夜姫に向かって無意識の内に手を伸ばす双間優斗。

「もし...、自分から厄介事に首を突っ込もうと思えば、二度と元の場所には戻れなくなりますわよ...」

そして、意識はそこで途切れた。

「お兄ちゃん...！！」

心配した朝日空が双間優斗を抱きかかえる。

その様子を白い外套を頭から被った誰かが閉鎖されたジェットコースターの上から見ていた事に彼女は気付く由も無かった。

プロローグ～それは混濁する記憶～

あまりにも息苦しい。

そして、茹だるように身体が熱い。

一緒に風呂に入っている朝日月夜が、双間優斗の口や鼻に向かって笑いながら水鉄砲を撃っていたからだ。

叔父は頭を洗いながらそれを優しく見守っている。

そう、小さな遊園地で一頻り楽しい時を過ごした後、双間優斗は家族と別れて朝日家にお泊りさせて貰っていたのだ。

双間竜斗は水鉄砲を避ける事も出来た。

だが、見事に食らい続けたのは朝日月夜の裸に見惚れ、自分の身体に起こった恥ずかしい反応を隠していたからだ。

別に女の子の裸を見るのは初めてでは無い。

幼稚園のプールの着替えでは男女一緒に着替えているし、自分の身体と違う部分も注視した事もある。

しかし、朝日月夜の裸は他の女の子の物とは全然違った。

決して見た目が違うと言うわけでは無く、双間優斗にとって特別なものに感じたのだ。

そして、風呂に入った後、双間優斗は朝日月夜と布団を並べていた。

だが、双間優斗は彼女の愛らしい寝顔や、小さな身体が気になって眠れなかった。

東京に帰る前に思い出を残したかったからか、それとも子供らしい異性への好奇心からか、双間優斗は熟睡している彼女の唇にキスをする。

だが、いつの間にかにそれはセーラー服姿の朝日空へと変わっていた。

「そんなお兄ちゃんは大嫌いや…。もう…。うちに顔を見せんといて…」

彼女を追い掛けようとするが身体が動かない。

「ざまーねーなぁー！！ お前にはこれから罰を受けて貰うぜー！！」

後ろから近江奏矢に羽交い締めされていた。

「感情に流されて女の子を傷つけるような奴は、股間をグチャグチャにされて当然よね」

ダイヤの4の女性が双間優斗の股間を蹴り上げる。

「一生、心を閉ざしていれば良いのに、中途半端に心を開くから人を傷つけ、自分も傷つく事になるのよ」

スペードの4の女性が全身を切り刻む。

「何をしても貴方の胸に空いた大穴は決して埋まりはしないわ」

ハートの4の女性が胸を穿つ。

「そうそう、すでに貴方の人生はとっくのとうに終わっているんだから諦めなさいよ」

クラブの4の女性が火あぶりにする。

双間優斗は無限に続くような苦しみの中で助けを求め続けるが、誰もかもが彼を見て見ぬふりをして助けようとはしない。

そこに宮城楽が通りがかる。

「双間さは普段から人に冷たくしてるのに、困っている時だけ助けて貰えるなんて、そんな都合の良い事なんて無いべ」

そう言うと彼は去って行く。

後に残されたのは闇よりも深い虚無。

「君には生きる価値すら無いって事だよ。だから、ボクがその身体を貰ってあげるよ。大丈夫、心配しなくても君よりも上手くやってあげるさ」

そして、何処迄も、何処迄も深く沈んで行く。

「自分の人生を投げ出すとは腰抜けも良い所ですわ。それは大切な人を何よりも傷つける最低・最悪の暴力行為ですわよ！！」

だが、そんな彼の手を香夜姫が掴み取る。

「ですが、今の今まで、本当によく頑張りましたわね。それだけは褒めてさしあげますわよ」

ただ一言、それだけで深い闇が払われ救われる気がした。

別れ～それは確かな現実～

双間優斗は脈絡の無い夢から抜け出し徐々に頭が覚醒して行く中で、香夜姫が朝日月夜と同一人であるかのように漠然と思っていた。

だが、それは絶対にあり得ない事である。

進行性の小児癌との闘病の末に幼い命を全うした朝日月夜の葬儀に参加して、遺体が火葬される所を確かに見ていたからだ。

不吉にも夜遅くに突然自宅の電話が鳴ったのが始りだった。

直ぐに家族に連れられて東京から新幹線に乗って神戸に行き、大きな斎場の入口で喪主である叔父と叔母に頭を下げられて迎えられたのを覚えている。

そして、彼女が小さな木製の棺に入れられ、大好きだった毛布や絵本、縫いぐるみに囲まれて安らかに眠っているのを見た。

元々色白で人形のように可憐な娘であったが、棺に空けられた小さな窓から覗く彼女の顔は、この世の物とは思えないぐらいに美しかった。

闘病によって髪の毛は抜けて痩せ細り、身体を切り刻まれて内蔵も殆ど残っていなかったが、カツラや化粧をして身体に綿を詰めて綺麗にしたと誰かが話していた。

それを聴いて訳も解らずに胸が痛んだのは未だに忘れる事が出来ない。

間も無くして告別式が開始された。

住職がお経を読む中で朝日月夜の幼稚園の同級生や保護者、叔母の大学の関係者、病院の医者等多くの参列者が涙しながら焼香していた。

だが、気丈にも叔父と叔母は涙を堪え続けたのが印象的であった。

告別式が終わると親戚一同でバスに乗って火葬場へと移動し、彼女の眠る棺が火の焼べられた釜へと入れられるのを見送った。

そして、約一時間後、僅かな骨と灰色の粉となった彼女と対面する。

形が残っている大腿骨等の骨を二人一組となって箸で掴み、陶器で出来た小さな骨壺へと納めて行く。

最後に火葬状の従業員が帚を使って遺灰を残らず骨壺に入れて頭蓋骨を被せると、それを木箱に収納して丁重に布に包んだ。

叔父はそれを首から下げて抱き締めると、抑えていた思いが溢れ出したように、人目もはばからず声を出して泣いた。

それを見て遺影を持つ叔母や、その場にいる全員が涙した。

当時は赤ん坊だった為に本人は覚えていないだろうが、双間優斗の母に預けられていた朝日空も、場の雰囲気を感じ取り泣き声を上げていた。

それから暫くして深い悲しみを抱えたまま叔父はこの世界から姿を消し、周囲には死因は伝えられずに密葬される事となった。

そう、彼らはもう居ないのだ。

朝日輝子～それは大人として生きる女性～

目が覚めると双間優斗は朝日家の自室のベッドで天井を眺めていた。

それは元々叔父が使っていた六畳の部屋だ。

元々の畳の上にフローリングを敷いて洋風にし、家具はベージュ色の木材と銀色の金属のツートンで統一されて全体的にモダンな雰囲気だ。

しかし、窓の前に置かれた長細いデザインの机の上に頓挫するボンダイブルーの初代iMacだけは異彩を放っている。

そして、壁面のモダンなデザインの本棚には、80年代から90年代に流行した少年漫画やライトノベル、日本製スポーツカーの模型が並べられている。

「随分と驚かされていたみたいだけど、目が覚めたようで良かったわ」

誰かが双間優斗の顔を覗き込む。

「姫...？」

「ふふふっ、随分と嬉しい事を言ってくれるじゃない。でも、私は貴方のお姫様じゃなくてオバ様よ」

完全に覚醒し切れていない為、目の前にいる人物を香夜姫だと思ってしまったが、関西なまりの標準語で指摘されてハッとする。

彼女はこの家の主である叔母の朝日輝子だった。

朝日空の母親だけあって彼女と顔の作りや雰囲気が似ているが、昨日出会った香夜姫とも何処か通じる所がある気がする。

それこそ寝ぼけて勘違い出来る程度には。

「一体、俺はどうしたんだ...？」

どうやら、正午過ぎまで寝ていたようであった。

開け放たれた窓から他の家庭で料理をする音や匂い、テレビからお昼のワイドショーの音声等が風に乗って流れて来る。

「優斗くんは出先で倒れちゃったみたいなの。」

空が救急車を呼んで病院に運ばれたんだけど、単なる疲労による昏倒だって言われて、結局私が車で家まで連れ帰ったってわけよ。

流石にバイクはメリケンパークの駐車場に起きっぱなしだけどね」

「ああ...、ありがとう...。それで空は...、空は何か言ってなかった...？」

「言ってたわね...、随分と混乱しているみたいで、ある事、ない事色々...。」

でも、あの子が貴方を凄く心配して、責任を感じていた事だけは確かで、必死な形相で夜通し看病をし続けてたわよ。

今はあまりの疲れに学校を休んで自室で寝ているけどね」

「そうか...」

「私はお昼の様子見に戻って来たんだけど、その様子だったら大丈夫のようね。あとで空にお礼を言っときなさいよ」

「そんなの解ってるよ...」

「ふふふっ、全然解ってない癖に。優斗くんは本当にあの人そっくりね」

朝日輝子は双間優斗の様子を見て年甲斐も無くクスクスと少女のように笑う。

「それって叔父さんの事か...?」

「ええ、あの人も都合が悪くなると大人ぶって解ったふりをする所があったのよ」

叔母が自分から叔父の事を話すのは珍しい事だった。

「それは意外だな。叔父さんって、もっとカッコ良い大人だと思っていたよ」

「子供から見れば解りやすくカッコ良かったかも知れないけど、それはあの子の価値観が何時まで経っても子供っぽいからよ」

「そうなのか?」

「この部屋を見ても解るでしょ?」

寝ても覚めても少年漫画の世界に憧れて夢見てばかりで、男性としては魅力的な事は確かだけど大人としては駄目な人だったわ」

「それを聴くとなんか親近感湧く...」

「ふふふっ、あとだらしな所もそっくりだわ。」

もともと朝日家は神の血筋を引くと言われるぐらい有数の名家でね、婿入りしたばかりのあの子は私に甘えて墮落した毎日を過ごしてたの。

しかも、大好きな国産スポーツカーをコレクションしたガレージを作ったり、有り余る資産を際限なく趣味につき込んでいたわ」

「くっ...、流石に俺はそこまで酷くは無い...。同じスポーツカー好きとしては羨ましい話ではあるが...」

「正直に言えば朝日家からすればその程度の遊びはどうって事は無いんだけどね。」

それでも何時までも甘やかし続けたらあの子の為にならないから、子供が出来たのを機に自分達の稼いだお金だけで生活してみる事にしたの。

ふふふっ、それが思ったより大変でね。

この古い団地で小さな食卓を囲み、毎日食べて行くのが精一杯の暮らしだったけど、掛け替えも無い程に幸せな時間だったわ」

「叔母さん...」

そう言って涙を堪えるように遠くを見る朝日輝子。

「そして、私は彼の事が好きだったわ。私の夫であり、子供達の父であり、私達にとって正真正銘のヒーローであった彼の事がね」

そう言って朝日輝子は寂しそうに笑った。

「じゃ、そろそろ私は出かけるけど...、親として、人生の先輩として、臨床心理学の研究者として一つだけアドバイスさせて貰うわ」

「ん...?」

「例えどんなに後ろめたい思いを抱いていても、それを押し殺して頑張る事が出来るのが、人間社会で生きる上での美德なのかも知れない。」

でも、人間は機械じゃない、感情を持った生物なの。

だから、私は時に自分自身の気持ちに耳を傾けて、自分なりのやり方で向き合う事も必要だっ
て思うのよ」

「...」

それは夫と娘を亡くした叔母が自らの経験から悟った事なのだろう。

そう思うと胸が痛くなる。

「大丈夫、例えちょっとばかり道を間違ったとしても、雨が降り地が固まるように成るように
成るわよ。

だから、傷つけ合う事を恐れずに勇気を持って突き進むと良いわ」

「ありがと、叔母さん...」

その言葉は本当に有り難く思えた。

「それにほら、諦めたら試合終了だって言うでしょ？」

叔父の遺した本を一通り読んだ双間優斗は、それが昔の漫画の台詞だと知っていた。

「台詞が古いって...」

真面目な叔母が漫画の台詞を知っているなんて意外であったが、ひょっとすると叔父が亡くな
ってから彼が遺した本を一通り読んだのかも知れない。

「ふふふっ、仕方無いでしょ、私はお姫様じゃなくて、オバ様なんだから...！！　じゃ、本当
に行って来るわね...！！」

叔母に改めて親近感を覚える双間優斗であった。

「ああ、行ってらっしゃい...！」

叔母を送ると部屋はシンと静まり返り、外から小鳥の囀る音が聞こえて来る。

双間優斗は暇を愛する男であったが、自ら望んでも居ないのにやる事が無いと言うのは苦痛
であった。

何よりも必要以上に嫌な事を考えてしまいがちである。

「よし...、バイクを取りに行くか...」

そう自分に言い聞かせるように呟くと、ベッドサイドテーブルの上に置かれていた鍵を握りし
める。

だが、一番の理由はこのまま家に居続けて、起きていた朝日空と顔を合わせた時に、気まずい
思いをするのが嫌だったからかも知れない。

停留所～それは様々な人生が集う場所～

双間優斗は朝日家を出ると片側二車線で道幅の広い県道95号線を少し下り、一階部分が児童館になっている団地の前にあるバスの停留所までやって来た。

県道95号線はかなりこう配がキツイのだが、今回のように下る分には楽である。

住民から二丁目のバス停と呼ばれるその場所には、二つの系統の路線バスが乗り入れられている。

六甲ケーブルの駅を始点にして県道95号線を使って団地の外側を通り、阪神電鉄本線の御影駅を目指す16系。

それから団地の内側をぐるりと周り、JR東海道本線の六甲道駅を目指す36系だ。

そのどちらの路線に乗っても阪急神戸線の六甲駅を経由し、JR東海道本線の六甲道に向かう事になる事は変わらない。

両方を合わせると引っ切りなしにバスが出ている事になるので、かなり便利な場所であると言えるだろう。

その為か平日の昼間だと言うのにバス停には大勢の利用客が並んでいた。

だが、その多くが買い物に向かうと思われる主婦やお年寄りばかりで、未成年は中学生だと思われる金髪少女ぐらいなものだろう。

彼女はボロボロのピンク色のスウェットを全身に着用し、如何にも怠そうにしながら携帯電話を弄っている。

おそらく夜遊びが響いて学校を休み、昼頃になって活動を開始したのだろう。

つまり、双間優斗と同じサボリストだ。

彼女のような人種は東京にも沢山いたが、何処に行っても変わらないものである。

先に来たのは36系だったが、双間優斗は次に来る16系を待つ事にした。

36系は大学のキャンパスに面して複数の停留所が設置されている為、時間が掛かる上に車内が五月蠅くてたまらないのだ。

かくして16系統に乗った双間優斗だが、二つ先の国際文化学部前の停留所から乗って来た乗客から声を掛けられた。

その壮年の男性に双間優斗は見覚えがあった。

「君は我が校の双間優斗君じゃないか？」

「はぁ、そうですけど...」

確かあの胸くそ悪い近江奏矢を鼻屑にしていた教授だったはず。

失礼ながら名前は知らない。

「ちょうど良い、君と話したいと思っていた所なんだ。六甲駅に付いたらお茶でもどうかな？」

「まぁ、良いですけど...」

面倒ではあったが断る理由も無いのでその誘いを受ける事にした。

因果応報～それは引き換えである～

阪急神戸線の六甲駅は小さな鉄骨造りの駅舎で、クリーム色の壁面が何とも言えない安っぽさを醸し出している。

バスターミナルは駅舎の下にあって改札口に面しており、その周囲にはソバ屋や売店等のありきたりな店が並んでいる。

駅舎を出ると道路上に自動車が列を成しているのが見える。

線路が高架になっていない為、踏切を超えるのに時間がかかるようだ。

利用客は住民と学生が中心と成っている為か駅前には商業ビルが殆ど無く、やたらと学習塾と開業医院ばかり目に付く印象である。

喫茶店は駅前の信号機の無い交差点を渡った所にあった。

ドイツ菓子を売りにしている神戸発祥のかなり有名な店の系列だ。

日本全国の有名百貨店の地下売場にも出店しているのだが、東京出身者だとそのイメージが強過ぎて、こんな小さな駅で喫茶店をやっているとは信じられない程である。

店に入りカウンターに進むと何処かで見た事がある店員が出迎えた。

「あれ、双間さじゃねーか、またサボりだっぺか！？」

東北弁でおなじみ宮城衆である。

「うっせーよ...！ って言うか何でお前がこんな所に居るんだよ...！？」

「何ってバイトに決まってるさあ。週三でここで働いているって言ってなかったべか...！？」

「知らん...！ 俺はどうでも良い事は直ぐに忘れる質だからな」

「またあ、双間さったら意地悪なんだから。所で隣に居る方は北村教授じゃねえべか？」

「ほう、君は私を知っているのかね？」

双間優斗と並んでいる北村と呼ばれた男は嬉しそうに目を輝かせる。

「と、当然じゃないですかっ...！！」

北村教授ってば風水なんかの東洋的な視点から地震予知を研究する第一人者として有名だし、オラじゃ無くても当然知ってますよお...！！

なあ、双間さ...！！」

「...え！？ あ、うん...、そうだな...」

「なんだっぺ、その間は...！？」

「はははっ、双間君は正直だな...！ では、ここで話していても仕方無いし、コーヒーと菓子を二つずつ頼むよ...」

「はい、畏まりました」

そして、双間優斗と北村教授は喫茶コーナーのテーブルに着く。

「早速だが、君は何故東北ばかりで地震が連発するか考えた事があるかね？」

「危険な断層があるからじゃないですか？」

双間優斗は即答する。

「そう、危険な断層がある事が原因である事は確かだ。」

しかし、実際には危険度の高い断層は日本中に存在し、何時何処で大きな地震が発生しても不思議では無いだろう」

「確かに...」

双間優斗は東日本大震災以降、そのような事を啓発する報道が多くなされている事を思い出す。

「それを考えると東京等の大都市圏が被害を免れ、東北ばかりに被害が集中している状況は不自然であると言える」

「本当に運が悪いとしか言いようが無い...」

「では、運が悪くなる原因とは何だろうか？」

「...」

それこそ考えた事も無かった。

「世の中には因果応報と言うものがあって、簡単に言うと自分自身の行いは巡り廻って、最終的に自分自身に戻って来ると言うものだ。

それが複雑に絡み合う事で運命と言うものが成り立っている。

しかし、より大きな力の流れを利用する事で、良い運気を自分の元へ引き込み、悪い運気を他所へと払うと言う学問が存在する...それが風水と呼ばれる物である」

「まさか、全ては風水のせいだって言うんですか？」

それには双間優斗もあきれ顔である。

「東京は元々江戸時代に高度な風水の知識を持つ天海僧正によって計画された都市であり、街を守る為に様々な工夫が成されている。

そして、東京の鬼門の方角に当たるのが東北なのだ。

その為、首都圏で行われる自然破壊や人々の便利な生活、悪意等のツケが、東北での地震や災害と言う形となって現れていると私は考えている」

「じゃあ、大正12年の関東大震災はどう説明するんですか？」

「明治23年に凌雲閣と言う当時としては高層の塔が浅草に建てられた事により、東京を守る結界が破壊されてしまった事が原因であると考えられる」

「東京に住んでたけど凌雲閣なんて見た事が無いな」

双間優斗は浅草の風景を思い浮かべるが、浅草寺の雷門や仲店通り、花屋敷、隅田川に浮かぶ金色の大便はイメージ出来ても、凌雲閣と言うのは記憶に無かった。

「凌雲閣は関東大震災によって倒壊したので現存していないのだ。

奇しくも関東大震災によって自己復元された結界であるが、現代になり凌雲閣と同様の方角に巨塔が建造された事により再び破壊された恐れがある」

「まさか、スカイツリー...!？」

それは東京の押上に建造された全高が634mにも及ぶ巨大な電波塔だ。

2012年5月22日。

つまりは今月末に開業予定と言う事もあり関西圏でも盛んに報道されていた。

「もし、結界の破壊によって東京に大地震が発生するならば、今年2012年の12月12日が濃厚だと

私は考えている」

「そんな馬鹿な...」

しかし、双間優斗は完全否定する事が出来ない重みを感じていた。

「だから私は自身の理論を使って厄を国外へと飛ばし、東京...、いや日本全土の危機を回避させる事が出来ないかと考えているのだが、君にはそれを手伝って欲しいのだよ」

「俺が...!？」

「そう、あの近江君を下した君になれば出来るはずだよ」

「何の...、事です...？」

そう言う双間優斗の表情は強ばっていた。

「おっ、双間さ何焦ってるんだべか？」

そこに他の客が使ったテーブルを片付けにやって来た宮城楽が話しかける。

「うっせーよ...!!」

「ふっ、やはり君は正直者だな」

「...」

そして、宮城楽の姿が見えなくなったのを見計らって北村教授が話を進める。

「あの実験の関係者である私には隠す必要は無い。

しかし、あの実験に関して多く情報を把握している私でも、謎に包まれたNo.19の大アルカナの正体が君であったとは思っても寄らなかったが」

「いや、それは...」

「君も知っての通りあの実験は再生能力や四大元素操作等、個々の能力を基準にして因果律に干渉する力を開発して行き、最終的にそれを際限なく拡大する事が目的である。

もし、君がこの戦いを勝ち抜き、全てのカードを手にして頂点であるNo.21に辿り着いた時、私の話を思い出してくれればそれで良いんだ」

木村教授の双間優斗を見つめる目は真剣であり、今更勘違いであるとは言い出せない雰囲気であった。

「強制はしない。だが、私に協力すると約束してくれるのならば、それなりの見返りを提供するつもりだよ」

「見返し...？」

「ああ、それは私の知っている情報の全てだ。試しに君の知りたい他のアルカナの情報を一人だけ教えよう。答えはそれからゆっくりと考えれば良いだろう」

脳裏に浮かんだのはNo.19『月』の大アルカナを名乗ったゴスロリ少女の姿だった。

彼女にもう一度会いたい。

取り返しの付かない道を歩もうとしているのは解ってはいたが、もうこれ以上は自分の気持ちに嘘を付いて生き続けたく無かった。

そして、北村教授の濁った笑いに背筋を凍らせながらも意を決する。

「それだったら...、知りたい人が居るんです」

大丈夫、成るように成るさ。

双間優斗は叔母に言われた事を思い出し、自分自身を無理矢理に納得させた。

香夜姫～それは闇の世界の住民～

阪急神戸線の六甲駅から電車に乗ること約七分...、西に向かって三つ隣の三宮駅にやって来た。

三宮は神戸の中心的な駅であり、阪急神戸線の他にJRの東海道本線、阪神電鉄本線、地下鉄西神・山手線、ポートライナー等に乗り換える事が出来る。

駅の南側にはSOGOやマルイ等の大型デパートがあり非常に栄えている。

また、双間優斗のバイクが置いてあるメリケンパークや、神戸モザイクのあるハーバーランド、南京町中華街と言った人気のスポットにも歩いて行ける距離である。

しかし、双間優斗の降りた阪急神戸線の三宮駅北口は、駅舎に沿って飲食店等が軒を連ねるアーケード街があったり、比較的ごっちゃりとした印象だった。

駅の左手にある小さな広場でiPhoneを使って目的地への経路検索をすると、迷うまでも無く北に向かって何処迄も一直線のようなのだ。

カラオケ屋や焼き鳥屋、焼き肉屋、居酒屋等が連なっている通りを北へと向かう。

そして、約300m程歩いた所にある中央分離帯のある幅の広い道路を渡ると雰囲気ガラリと変わった。

品の良さを感じさせる清楚なマンションが多くなり、通りに面したオープンテラスのある落ち着いた喫茶店があったりと、先ほどのまでの喧騒が嘘のように閑静な様子だった。

しかも、登り坂が続く道の先には視界を遮る物は何も無く、良く晴れていると言う事もあって六甲山の緑が綺麗に見えて心が癒されるのを感じる。

坂を登り切り、突き当たった通りを右に曲がると、また更に雰囲気が一転した。

最先端に行くコンクリート打ちっぱなしのモダンな建物と一緒に、現代の日本とは思えないような煉瓦造りや木造の古い洋館が建ち並んでいるのだ。

その為か通りには木材の懐かしさを感じる香りが漂っている。

そこはかつて北野異人館街と呼ばれ、明治の開港と共にやってきた外国人が住む居留地となっていた為、現代もその時代の古い洋館が数多く残っているのだ。

双間優斗はiPhoneで再度詳細な場所を確認し、通りの一角にある白い外壁を持つ洋館の前で立ち止まる。

門扉の所に出された看板には英国館と書かれている。

どうやら、ここが探していた目的地で間違い無いようだ。

北村教授から聞いた情報によるとNo.18『月』の大アルカナの少女は、自らの能力を活かして神戸を中心に祓魔師を生業としているらしい。

祓魔師とは読んで字の如く妖怪や幽霊を退治したり、複雑な因果によって発生する怪奇現象を解決する仕事である。

神戸は旧時代的な妖怪伝説、現代的な都市伝説、現実的な殺人鬼、未来的なUFO、UMAに至るまで数多くの怪談が噂されている。

それが本当であれば仕事には事欠かないのだろう。

そんなアホなと言いたい話ではあるが、超能力者同士の戦いに巻き込まれた挙げ句に、身を持って憑依体感をした後では、最早何でもアリと言った所である。

そして、彼女への仕事を仲介してくれるのが、白ウサと呼ばれる懐中時計を持った小柄なウサギの着ぐるみであると言われている。

先日、双間優斗と朝日空が目撃したものがそうだったのだろう。

白ウサは神出鬼没で神戸各地に出没しているらしいが、特に北野異人館にあるこの英国館では頻繁に目撃されているとか。

双間優斗は係の人に700円と彼にとっては高額な見学料金を払い、駄目で元々と思いつつも僅かな希望に縋って英国館の敷地へと踏み出す。

庭に入って直ぐの所にあるカーポートには立派な銀メッキのグリルやバンパーと、丸形の四灯ヘッドライトが特徴的な黒塗りの車が停められている。

エリザベス女王も愛用していたダイムラーリムジンと言う、まさに英国車の代名詞とも呼べるような車である。

そんなカーポートの脇の建物添いには、重厚な西洋甲冑と並んで複数着の英国風のマントが掛けられている。

どうやら、マントを着て西洋甲冑と記念撮影をする事が出来るらしい。

マントの肩の部分にはチェック模様のケープが取り付けられており、胸にはEHと書かれた紋章が刺繍されており、なんとなくハリーポッターの映画の衣装を思わせた。

玄関では斧付きの槍を持った帽子にローブを着用した髭面の男の人形が出迎えていた。

英国館の内部に入った一階部分には、所狭しと様々なお酒の瓶が並んだやけにリアルなバーカウンターがある。

それもそのはずで17時の閉館後はKING OF KINGSと言う英国風のバーとして実際に営業しているようだ。

杯を思われる彫刻が施された木製の柱に支えられたカウンターテーブル上方の欄間部分は、ステンドグラスのようになっていて色とりどりの光が溢れている。

また、歴史を感じさせる革張りのソファーや木製のテーブル、柔らかい光を発するシンプルなシャンデリア、煌めくカバラのガラス食器等の調度品も美しい。

双間優斗はまだ酒が飲める年齢では無いが、こんな所で夜のひと時を過ごせたら素晴らしいだろうと思った。

そして、二階へと上がるとBAKER STREET W1 221bと表記された部屋がある。

そこは推理小説で有名なシャーロックホームズの部屋を模した場所で、その再現度の高さは世界第二位の認定を受けているらしい。

もちろん、世界第一位はイギリスはロンドンのベーカー街にある本家本元だ。

だが、世界中に幾つもシャーロックホームズの部屋のレプリカがあるとは思えないので、実質は世界二位も何も無いような気がしないでも無い。

部屋に入ると黒いスーツに見を包んだ紳士の人形が、窓から北野の街を見下ろしているのが目に入る。

彼がシャーロックホームズその人なのだろう。

部屋には所狭しと家具が設置され、バイオリンや葉巻、書物、食器、レトロな時計、額縁に飾られた写真等が散りばめられている。

特に目を引くのがテーブルの上に置かれた科学実験道具だ。

シャーロックホームズは大学で科学実験を学んでおり、後に独自の血痕判定の新薬を開発したりと、科学的検証を持ち込んだ現代的な捜査の第一人者と言われている。

双間優斗はその後も一通り館内を見て回ったが、あの目立つ着ぐるみの姿は何処にも無かった。

どの道、こんな簡単に見つかるとは思えなかったし仕方無い事だろう。

だが、諦めて帰ろうと一階に降りると、先ほどのバーカウンターの所で信じられない物を目撃する。

「いたっ...！！」

双間優斗は思わず声を出してしまった。

探し求めていた白ウサがバーカウンターに座り、ダンディにワイングラスを傾けていたのだ。

まだ、バーは開店していないはずなのに。

その前にあの格好でどうやって飲み物を口にしているのか謎である。

しかし、以前その着ぐるみを目撃した時のような胸の高鳴りは無く、あまりの呆気なさに違和感を覚えながらも双間優斗は声を掛けようとする。

「おいっ...！！」

だが、白ウサはゆっくりと振り返りそこに双間優斗がいる事を確認すると、まるでニヤリと笑うかのようにクリクリした赤い目を鋭く輝かせた。

「なっ...！？」

あまりに怪しい雰囲気思わず身構える双間優斗。

次の瞬間だった。

白ウサは全速力で駆け出し屋敷を後にしていた。

「ちょ、待てよ...！！」

突然の事に呆然とする双間優斗であったが、直ぐに我に帰って白ウサの後を追う英国館を出る。

白ウサは観光客で溢れ返った通りを凄まじいスピードで縫うように走り抜けて行き、双間優斗が全力で走っているのにも関わらず加速度的に離れて行くようだった。

だが、幸いにも英国館から100m程西に行った所にある、新築されたばかりと言う印象のパン屋の角を右に曲がったのが見えた。

双間優斗はやや遅れて右折する。

北に向かって坂を登って行く石畳の細い路地の先に白い影が見えたが、一瞬こちらを振り返ったかと思うと再び走り出して姿を消してしまう。

どうやら道なりに進んだようだったが、このままでは神戸モザイクでの時と同じように見失ってしまうかも知れない。

だが、不思議と焦燥感は感じて居なかった。

人間離れしたスピードを発揮する小さな体に、不釣り合いな程の大きな時計を首から下げた燕尾服姿の着ぐるみは白ウサ以外にあり得ない。

しかし、あの時と何かが違っていたからだ。

進んだ道の先は高台から神戸の街を一望出来る円状の広場になっていて、それを舞台に見立てるように観客席を思わせる階段が扇状に広がっていた。

その中心に白ウサの姿があった。

首から下げた大きな時計を確認する芝居がかった動きは、この広場を舞台にした演劇的一幕であるかのように思えた。

「お前...、急に走り出すなよな...！」

双間優斗が息を切らせながら文句を言うと、白ウサは肉球の付いた厚手のキッキンググローブのような指を彼の背後...、つまりは広場の北側へと差し向けた。

「ん...？」

双間優斗が振り返ると、そこには赤い煉瓦造りの洋館が建っていた。

建物の周囲は天高く伸びる針葉樹と木製の柵に囲まれ、六甲山に面していると言う事もあってより閑静で、北欧を思わせるような清浄な空気が流れていた。

時や音が止まって思える程である。

二階部分は木製の枠に囲まれた白い壁面になっている。

一階と二階の南西側には木造の壁に囲まれたベランダがあり、大きなカマボコ状の窓が空けられていて眺めの良さが伺える。

何より特徴的なのは南東側にある尖塔の頂きに見える風見鶏のシルエットである。

その為、この洋館は風見鶏の館と言う愛称で呼ばれていた。

双間優斗は風見鶏の館に初めて白ウサを目撃した時のような、或は香夜姫と出会った時のような胸の高鳴りを覚え、心惹き付けられるような不思議な魅力を感じていた。

「こうなったら、中に入るしか無いよな...」

双間優斗は意を決して木造の柵に取り付けられたアーチを潜ろうとする。

だが、その時だった。

「まったく厄介な来客もあったものですわね」

双間優斗が鈴が鳴るような声が聞こえた方向を振り返ると、いつの間にかにゴスロリ姿の少女がベンチが据え付けられた広場の展望台部分に腰掛けていた。

煌めく銀色のツインテールが風に靡き、切れ長の瞳が涼しく輝いている。

その背後には西日に包まれた神戸の街が広がっていて、まるで輝く世界を背負っているかのように見えた。

「お前は姫...、香夜姫...！！」

そう、彼女こそはNo.18『月』の大アルカナ...香夜姫、双間優斗が探し求めていた少女であった。

「あれだけ言ったのにも関わらず、自分から顔を突っ込んで来るとは世話が焼けますわね...！！」

」

そして、香夜姫はふわりと広がったドレスのスリットから日本刀を抜き出すと、目にも止まらないスピードで駆け出し双間優斗に向かって斬り掛かって来た。

「!？」

あまりの展開に目を瞑る双間優斗であったが、何時迄経っても痛みは無かった。

もちろん、瞬間的に命を落としたと言う訳でも無い。

双間優斗が恐る恐る目を開けると、斬りつけられたのは香夜姫との間に立っていた白ウサである事が解った。

白ウサの着ぐるみが左右真っ二つに斬り裂かれ、中からピンク色のフードを目深に被った小柄な少女の姿が現れる。

影となっている為にその顔や髪型は窺い知る事は出来ない。

「で...、貴女は誰ですか？」

「いやだなあ、ボクは君の仲介人...、白ウサちゃんに決まっているじゃない...？」

「あら、本物の白ウサはわたくしが世を忍ぶ為の仮の姿ですわよ。貴女のような下賤の者が騙って良いものではありませんことよ」

「ふふふっ、白ウサが君の着ぐるみだっけと言うんだったら、これはもう奥の手を使って最終手段に出るしか無いよね...!!」

何事も無かったかのように白ウサの着ぐるみが復元されて少女の身体を覆って行く。

次の瞬間だった。

凄まじいスピードで白ウサは双間優斗へと駆け寄り、彼の首筋に向かって鋭いハイキックを繰り出していた。

「ぐっ...!!」

まともに食らったら首の骨が折れてもおかしくは無い勢いであったが、咄嗟の事に双間優斗は反応する事が出来ない。

「そうはさせませんわよ...！」

香夜姫は予知能力とそれを活かすスピードによって双間優斗と白ウサとの間に割り込み、黒いガーターストッキングに包まれた細い脚を蹴り上げる。

双間優斗の眼前で交差するハイキックとハイキック。

互いの自我領域によって反発し合い、吹っ飛ばされる香夜姫と白ウサ。

「なかなかやりますわね...!!」

「ふふっ、この程度で関心されちゃ困るじゃない！」

香夜姫が右手で繰り出した突きを白ウサが左手で弾き、白ウサが右脚で繰り出した膝蹴りを香夜姫が左手で受け止め、その反動で香夜姫が白ウサの背後に回り込む。

そして、香夜姫が白ウサの後頭部に向かって渾身の右フックを放つが、白ウサはまるで背中に目があるかのようにタイミングを合わせ香夜姫の突きを掴んで投げ飛ばす。

香夜姫は華麗に宙を舞い態勢を整えると、白ウサの頭頂部に向かって自由落下しながら踵落としを食らわそうとする。

だが、白ウサは右に回転するように身を捻って攻撃をかわし、その勢いを活かして無防備になった香夜姫の左頬に向けて右の膝蹴りを放つ。

それに対して香夜姫は攻撃を食らいながらも、右方向に回転を同期させて勢いを殺す。

そして、白ウサの体重を支える軸になっていた左足に向けて、渾身の右しゃがみローキックを放つ。

足下を掬われ浮かび上がった白ウサは空中で身を捻り、しゃがんだ香夜姫の頭頂部に向かって右の拳を突き立てながら落下する。

香夜姫は左足を軸にして右のアップercutを繰り出す。

拳と拳が激しくぶつかり合うと自我領域の反発によって閃光が走り、二人の身体が弾かれ戦いは振り出しへと戻る。

「どう、ボクの強さは？」

白ウサのクリクリとした赤い瞳が光り、自信たっぷりに笑っているかのように見える。

「確かにここまで私と張り合ったのは貴女が初めてですわ。ですが、そんな借物の力で勝ち誇るとは哀れとしか言いようがありませんわね」

それに対して香夜姫は苦笑する。

双間優斗は含みのある香夜姫の言葉に思わず考えさせられる。

その凄まじい攻防は双間優斗の目では追い切れない程のスピードで行われていた。

おそらく両者の身体能力は互角なのだろう。

しかし、それだけでは説明出来ない戦いであったと双間優斗は思った。

何故ならば予知能力によるアドバンテージがある香夜姫と同様の反応速度を発揮するには、彼女と同様の予知能力が無いと不可能だからだ。

「まさか、白ウサにも予知能力があるってのか...！？ いや、身体能力も互角である事を考えると、相手の能力をそのままコピーしているって事か...！！」

双間優斗がポツリと呟く。

「ふふふっ、ご名答ですの。

恐らくは自我領域によって発展させたサイコメトリーの亜種で、具現化した物から他人の思念を再現する能力だと考えられますわ。

それを応用して人の服装を具現化して身に纏う事で、能力の再現すらも可能にしているんじゃないか」

「ふふふっ、さすが前大会の優勝者であるNo.19『太陽』の大アルカナと、今大会の優勝候補と目されているNo.18『月』の大アルカナと言った所だね！！

そう、それこそがNo.9『隠者』の大アルカナであるボク的能力さ！！

でも、だからと言って全ての面で互角の力を持つ相手にどう戦うって言うんだい！？」

「ふふふっ、貴女とわたくしが互角とはちゃんちゃらおかしいですわね」

香夜姫は心の底から滑稽な物を見たかのように笑う。

「一体、何を根拠にそんな事が言えるんだい...？」

白ウサも負けじと笑う。

「わたくしの最も得意とするのは徒手格闘術ではなく、様々な得物を状況によって使い分ける武器戦闘術ですわよ」

そう言うと香夜姫はスカートの中から鎖鎌を取り出し分銅を振り回す。

「今まで武器を使わないで戦って来たのは、貴女に合わせていたに過ぎませんわよ。あまりに呆気なく倒し過ぎて面白く有りませんからね！」

「だったら、ボクも武器を具現化させるまでだよ！」

白ウサも鎖鎌を具現化させると香夜姫同様に分銅を振り回した。

そして、二人は遠心力で勢いの付いた分銅を同時に投げつけ、金属がこすれ合う音と火花を立てながら鎖が絡み合う。

互いに鎖鎌を捨て安全ピンを外した煙玉を投げ合うと、周囲を覆う煙幕の中で得物を日本刀に持ち替えて一気に間合いを詰める。

煙幕の中から抜き身の刀同士がぶつかり合う甲高い音が何度も聞こえて来る。

北から南へと吹き抜ける強い風によって煙が晴れると、激しいつばぜり合を繰り広げる香夜姫と白ウサの姿が見えた。

「ほら、互角でしょ...!？」

「それはどうでしょうかね...!？」

香夜姫は瞬間的に力を抜いて白ウサの刃を受け流すと、指を器用に使いバトンのように刀を回転させて、隙を突きながら縫いぐるみの身体を切り刻んで行く。

「くっ...!!」

香夜姫に出来る事は自分にも出来るはずだと、白ウサは同じ戦法を取ろうとするが、ガシャンと言う音を立てて刀を落としてしまう。

「き、キミの能力をコピーしているはずなのに何で...!？」

「あら、着ぐるみの姿で満足に武器が扱えると思っているんですの？」

香夜姫はスカートをたくしあげ太腿に括り付けてある拳銃を取り出すと、その銃口を白ウサへと向け弾丸を一斉射出する。

同時に白ウサも拳銃を具現化して飛んで来る弾丸を撃ち落とそうとする。

香夜姫の能力と技量を持ってすれば決して不可能な事では無いのだが、白ウサのキッキンググローブのような手では引き金を握る事は出来なかった。

「し、しまった...!!」

「やはり、貴女は見た目通りの道化でしたわね!!」

白ウサの全身に弾丸が浴びせられる。

それが決定打となって白ウサの着ぐるみと自我領域は消失し、中から現れたピンクのフード付きスエードを着用した少女が膝を付く。

「やっぱり、強い...!!」

その戦いを傍観していた双間優斗は思わず歓声を上げた。

「ぐっ...」

少女は肩で息をしている。

フードはまだ被ったままであるが大分幼いように思える。

「折角ですからこれは戴いておきますわね」

そして、香夜姫が少女のスエードのポケットを漁り、No.9『隠者』のカードを奪い取ると、勝敗が決せられる事となった。

「さて、どうしてこんな事をしたか聴かせて頂きますわよ」

香夜姫は地に伏せたフード少女の前で腰に手を当てて仁王立ちする。

その姿は威圧的で小さな巨人のように思えた。

「ふんっ、絶対に言うもんか！」

劣勢に立ちながらもフード少女は強硬な態度を崩さない。

「ふふふっ、それならそれで構いませんのよ。わたくしの楽しみが増えるだけですからね...！」

そう言うと香夜姫はスカートから鞭を取り出し、フード少女を掠めるようにして地面を叩き鳴らす。

「ひ、ひいー！！ そんな脅しが効くと思っているの...！？ ボ、ボクはこう見えて我慢強い子なんだぞ...！！」

そう言うフード少女は今にも漏らしそうな程に身体中を震わせていた。

「まあ、貴女が北村教授子飼のスパイである事はバレバレですけど」

「な、何でそれを...！？」

明らかに動揺するフード少女。

「ふふふっ、語るに落ちるとはこの事ですわね」

「ぐっ...！！」

香夜姫が少女のフードを剥がすと自分で染めたような金色の髪が露わになる。

「お、お前は...！」

双間優斗はその顔に見覚えがあった。

朝日家近くにある二丁目のバス停で見かけたサボリスト中学生である。

「おそらく貴女はこの方の動向を監視して逐一報告し、北村教授と対談する機会を作るように命令されていたのでしょう。

そして、その方がわたくしとの接触を希望した為、案内役である白ウサの目撃例が多い英国館に先回りして、そこに残った思念を具現化した着ぐるみを身に纏った。

その理由は簡単ですの。

再現した思念を使って案内役に徹して拠点まで潜入し、その方と教授の敵対勢力であるわたくしが手を組む事態になれば抹殺する為ですわ。

わたくしと白ウサが同一人物だと読み切れなかったのは失敗でしたけど」

「ぐっ...、悔しいけどその通り...。こんな簡単に割れちゃうなんてスパイ失格だね...」

「まあ...、相手が悪かったと思って気にすんなよ...。

確かに前後の状況や、戦闘中に分析した能力なんかの材料はあったと思う...。

だけど、普通はそれだけじゃここまで完全な推理なんて出来っこないし、始めから全て知っていた上で泳がされてたとしか思えないしな...」

双間優斗は気落ちしたフード少女があまりに可哀想で思わず声をかけてしまった。

「あらあら、敗者を励ますとはお優しい事ですわね。ですが、わたくしが全てを認知していたと言うのは真実ですわ」

香夜姫が指を鳴らすとメイド服姿の長身の女性が風見鶏の館から登場する。

「彼女はわたくしのメイドである柊田聖蘭さんですわ」

だが、双間優斗には彼女に見覚えが無かった。

「いや、誰だよ...？」

「ふふふっ、貴方は何処かしらで聖蘭さんを見ているはずですよ。

ある時はバスを待つ主婦として、ある時は喫茶店の利用客として、ある時は北野異人館街の観光客として、常に周囲に紛れ込み貴方を監視していましたから」

「そんな...！！」

双間優斗は驚きを隠せない。

北村教授の工作は思い返せば解る次元であったが、香夜姫からも監視されていた事は全く覚えが無かったからだ。

「北村教授からNo.19『太陽』の大アルカナだと勘違いされる恐れがあるのに、何の対策も無いまま貴方を放置するわたくしではありませんのよ」

「勘違い...！？ えっ...！？ な...、なんだって...！？」

香夜姫の衝撃の言葉に混乱するフード少女。

「ですが、貴方は自分から北村教授の誘いに乗ったばかりか、敵対勢力であるわたくしと接触を持ってしまった。

今更間違いを訂正した所で始末されてしまうでしょうね」

香夜姫は双間優斗を哀れむように苦笑する。

「くっ、ただ俺はただお前の事が...、この戦いの事が知りたかっただけなんだよ...！！」

双間優斗は声を荒たげて言う。

「焦らずとも後で教えて差し上げますわ。貴方はもう引き返せない道を歩んでしまっているのですから。ね、双間優斗さん...？」

香夜姫は微笑みながら双間優斗に手を差し伸べた。

「どうして、俺の名を...！？」

彼は彼女の手を握りながら聴く。

「ふふふっ、闇の世界へようこそおいでくださいました。わたくしは香夜姫、改めてよろしくですわ！」

双間優斗は香夜姫が根城にしている風見鶏の館に通された。

建物東側にあるレナリア...、ライン川と書かれた木製のアーチを潜り、石造の階段を上った所が玄関になっている。

玄関も石造で重厚な印象だ。

建物に入って直ぐの所にある一階のホールは、壁から天井まで木材に縁取られた白い内装が特徴的だった。

右手にある階段塔の壁面に設置されたカマボコ状の窓や、左手にある開け放たれた居間から光が射し込み、かなり明るい印象である。

「さっき見た英国館の伝統的な様式と比べると、なんとなく個性的な雰囲気だよな」

それが館内を見た双間優斗の感想であった。

「あら、良く気付きましたわね」

それを聴いた香夜姫は微笑みながら言う。

「そう、この館は構造と装飾の一致を理念として、唯一無比なデザインを尊重するユーゲント・シュティール...、青春様式と呼ばれる19世紀末の意匠が施されているんですよ」

「へえ、なるほどね！」

「ふふふっ、優斗さんは敵の罠に自ら飛び込むようなお馬鹿さんですのに、時折物事の本質を捉えた鋭い事をおっしゃいますのね」

「ぐっ、馬鹿は余計だろ、馬鹿は...！！ まあ、馬鹿なのは疑いようが無い事実だけど...！！」

「あら、このわたくしがわざわざ褒めて差し上げているんですから、ここは素直に喜んで下さいな」

「やっぱり、全然褒めてないよな、お前...！」

そして、香夜姫、双間優斗の後からメイドである柊田聖蘭に両手を縛られて拘束された元No.9『隠者』の大アルカナであるフードの少女が付いて来る。

「なんで、ボクが拘束されなきゃならないのさ...！」

「お嬢様の情報を持った北村教授のスパイを帰す訳には行きませんから、貴女はこの戦いが終わるまで半永久的に幽閉させていただきます」

柊田聖蘭は柔和な笑みを浮かべながら、感情を感じさせない声で言う。

「そ、そんなぁ...！」

絶望的な表情を浮かべるフード少女。

「ふふふっ、そんなに心配しなくても、家族や学校はこちらから説得しておきますわ。

しかも、教員免許を持つ聖蘭さんから素晴らしい教育を受けられますから、学業的には大きなプラスになると思いますわ。

おまけにわたくしの仕事を手伝って頂ければお給金だって出しますし、貴女にとって決して悪い話では無いはずですよ。

もっとも、脱走したり、北村教授と連絡をとろうとすれば、No.3『女帝』の大アルカナで前大

会からの生え抜きでもある聖蘭さんが黙っていませんが」

フード少女を見て香夜姫が残虐に笑う。

「ぐっ、強制的に勉強したり、働かされるぐらいだったら、まだ監禁されるだけの方が全然ましだよお...！！」

生粋のサボリストである双間優斗には彼女の叫びが悲痛に思えた。

「えっと...、お前の名前なんだっけ...？」

思わず彼女に声をかける双間優斗。

「山田...、山田キララだよ...！！」

最近、ニュースでキラキラとした名前を付けられた子供が多いと聴くが、実際に目にしてみると苦笑物である。

「あ、ああ...、なんか色々とお愁傷さまだな...」

「ああもうっ...、同情するなよお...！！　そう言う反応されるのが一番ムカつく...！！」

山田キララは最早涙目だ。

「あら、優斗さんったら、人の心配をする前に自分の心配をしたらどうですか？　わたくしに監視されるのは貴方も同じなんですから」

そんな彼らを見て香夜姫が笑う。

「えっ、マジ...！？」

「ええ、貴方は北村教授から命を狙われる恐れがあるのですから当然ですわよ」

「まさか、俺まで勉強したり、仕事させられたりしないよな...？」

「ふふふっ、昔から働かざる者食うべからずと言いますわよ」

「な...、なんてこった...！！」

「それにわたくし個人としても貴方を帰せない理由がありますしね」

そう言う香夜姫の笑みは得体の知れない黒い感情が込められていた。

双間優斗は改めて自分自身の向かう先が、取り返しの付かない道であると思い知った。

そして、ロビーの正面にある食堂へと向かう。

食堂の壁面は下半分が中世ヨーロッパの城壁を思わせる四角い突起物が並んでいる木製の意匠で、上半分は漆喰だと思われる白い意匠となっている。

右手の壁面には地下のキッチンから料理を運ぶリフトや、トタンが貼られた中に氷を入れて使う冷蔵庫のようなものが内蔵された大きな戸棚がある。

その奥には飾り暖炉が見える。

天井は木製で梁の数が必要以上に多い印象だ。

正面にあるカマボコ状の大きな窓と、左手の開け放たれた扉の先にあるベランダからは柔らかい光が溢れていた。

双間優斗と山田キララは柘田聖蘭に促され、八人掛けの長い食卓へと着席する。

窓がある上座に香夜姫が座ると、柘田聖蘭は軽く会釈して退室した。

「さて、優斗さんも二度程目撃した戦いですが、これはブラフマンと名乗る教授が立案した実験ですわ」

「ブラフマン...？」

「ええ、超常現象の専門家でタロットカードを使った独自の能力開発法を確立した為、No.0『愚者』...始祖のアルカナ等とも呼ばれていますの」

「アルカナか...、実際自分の目で見ても信じ難い力だったよな...」

「超能力と言うの誰もが潜在的に持っている本能のようなものですわ。

ただし、わたくしのように意識して能力を使う事が出来る人はごく僅かで、無意識に能力を使用していてもそれに気付かずに一生を終えてしまう人が殆どですの。

そこで催眠術を使った強い暗示によって、能力を顕在化させたのがアルカナと呼ばれる人達ですわ」

「誰でも持っている本能って事は、俺でもあんな能力を使えるようになるのか...？」

「もう、本当に馬鹿だなあ...、そんな訳無いじゃないの...！！」

双間優斗の疑問に対して山田キララが横やりを入れる。

「ぐっ...！！ お前にまで馬鹿にされる筋合いは無いぞ...！！」

双間優斗は頭をポリポリと搔く。

「ふふふっ、答えはイエスでありノーでもありますわ。

顕在化しただけの能力では自分の内側で完結していて、外界への強い影響力を持っていない場合が多いんですの。

例えばわたくしでしたら靈感、山田キララさんは残留思念の感知、近江奏矢であれば強い耐候性と行った所でしょうか。

それから能力を発展させていくには、特別な才能が必要になって来るんですわ」

双間優斗には今迄見て来た戦いで気になる単語を聴いていたのを思い出す。

「それが、自我領域って奴か...？」

「ご名答ですわ」

香夜姫はニヤリと笑う。

「もし、自分と呼べる領域を身体の外側まで拡大する事が出来れば、能力の外界への影響力も必然的に強くなりますわ。

では、自我とは如何なるものか。

それは他人との摩擦によって認識されるものだと言われてますわ。

また、共通する認識を持つ者が集まれば集団心理が働き、増長されて外界の常識が蔑ろにされる傾向にありますの」

「なんつーか、心理学的だな...」

「ふふふっ、超常現象や超能力は超心理学と呼ばれ、一般的な心理学の延長線上にあると言われてるんで当然ですわね」

「...」

双間優斗は何か心当たりがあるのか押し黙る。

それを見た香夜姫が静かに笑う。

「その理論を応用してアルカナと言う共通する認識を持つ能力者同士を戦わせてカードを奪い合

わせる事で、絶対的な自我を確立して何処迄も拡大させて行くように導く。

それがブラフマンの提唱する能力開発法ですの。

ですが、因果を歪められる程の自我領域を発揮出来るのは、大アルカナと言う強力な暗示を受け入れられた者のみですわ。

弱い自我領域しか持たない者は小アルカナと呼ばれていますの」

「小アルカナ...、ああ近江奏矢の取り巻き達か...！」

「小アルカナは大アルカナの約四分の一程度の力しか持っていません。

その代わりに大アルカナ一人、小アルカナ四人の最大五人で戦果であるカードを共有する事が許されていますわ。

ですから、近江奏矢のように複数の小アルカナと徒党を組む方が多くいますの。

彼らのように上手くフォーメーションを組めれば、大アルカナ二人分以上の力を発揮する事も可能ですわ」

「確かにアイツらは強かったよなあ...」

「更に彼らは地の利を活かして力を増していましたしね」

「地の利ってのは...？」

「自分にとって有利な場所で戦略的に戦うと言う事ですわ。

自我領域は精神状態に大きく影響される為、馴染みのある場所だと三倍近くまで強くなる傾向がありますの」

「なるほど、近江奏矢はインターネットで場所を指定して、お前に対戦を挑んだみたいな事言ってたしな」

「ええ、今回の戦いのように能力者同士が偶発的に戦うケースは稀なんですの。

大凡の場合はインターネットを通して対戦の申し込みをして、運営によって選ばれた公平を期した舞台上で戦う事になりますわ。

対戦相手は登録された中から自由に選ぶ事が出来るんですが例外もありますの。

そう、ソーマ様や聖蘭さんのようなイレギュラーな相手や、大アルカナから小アルカナへは対戦を申し込む事は出来ませんわ。

そして、戦いを重ねて一定の条件を満たしさえすれば、近江奏矢のように任意で舞台を指定出来るアドバンテージを得られるんですの」

「条件...？」

「ええ、それはアルカナの大・小に関わらず、四人以上に勝利する事ですわ。

小アルカナのみの構成で徒党を組んでいる場合は、大アルカナ一人以上に勝利する事が条件となります。

一度得たアドバンテージは何度使用しても失われる事はありませんわ。

また、アドバンテージを持つ者同士が互いに場所を指定した場合、運営側が用意した公平な舞台上で戦う事になりますわ」

「ちなみに勝利条件ってのは相手を倒してカードを奪い取る事で良いんだよなあ...？」

「ええ、その認識で間違っていないわ。相手の自我領域を何らかの手段で攻略するという前置

きはありますが」

「それとカードを失うと能力はどうなるんだ...？」

「サイコメトリーみたいな基礎的な能力は残ってるけど、それを発展させる自我領域は使えないみたいだよ！」

双間優斗の疑問に応えたのは山田キララだった。

彼女は先ほどから自我領域を展開させようとしているが無理なようだ。

「また、一度勝利した相手にカードを返却する事で、勝利を撤回する代わりに半強制的に傘下へと加える事も可能ですの。

もっとも、傘下の小アルカナもアドバンテージも、わたくしには必要ありませんけど」

そう言って笑う香夜姫。

「そりゃ、お前には必要無いかも知れないけど、だからこそ弱者にはこれぐらいの優遇処置は必要だよな...」

「ん、どうして！？ ボクは小アルカナに優し過ぎるこのルールはズルイと思うんだけど！！」

「お前は参加者でそれなりに実力もあるのに脳みそは残念だよなあ...。あと、優遇されているのは小アルカナだけじゃ無いだろ...？」

あまりにも拍子更けた事を言う山田キララに苦笑する双間優斗。

「えっ、何で！？」

「小アルカナとの対戦は最大人数でパーティーを組んだり、アドバンテージを得るチャンスだったのは解るだろ...？」

だが、大アルカナからは小アルカナに挑めない...

って事は必然的に小アルカナに勝負を挑まれるような、優勝候補から遠いと思われる弱い大アルカナも有利になるはずだぜ...」

「そ、そうだよなー！」

と手のひらを叩いて頷く山田キララ。

「って、ホントに解ってるんかよ...？」

「わ、解ってるに決まってるじゃん！！」

その割には挙動不審な様子の山田キララ。

「ふふふっ...、貴女はスパイにしては随物と可愛らしいですわね...」

「ああ、目出たいぐらいにな...」

香夜姫の苦笑に頷く双間優斗。

「愛でたいぐらいって、そんな事言われていも困るよお！！」

と言って顔を赤くさせる山田キララ。

「なにか勘違いしているみたいだが、面倒くさいからそのまま放置すっか...」

気を取り直して話を続ける双間優斗。

「あと、アドバンテージを得るか、パーティー組むかによっても戦略が変わるよな...。

もし、早い時期でアドバンテージを得られたとしたら、早々に敗退する事はまず無いだろうし、短期的に見るとかなり有利だと言える...。

でも、後半戦になればパーティーを結成した奴らがアドバンテージを得るだろうから、長期的に見るともの凄く不利になると思うが...」

「じゃあ、早いうちにパーティーを組むとどうなるの？」

間髪入れずに聴く山田キララ。

「場所に関係無く常に平均した実力を発揮するだろうな...」

でも、早期からアドバンテージを発揮する奴らに対しては不利で、冗談抜きで早々に敗退する可能性も高いと思う...」

ただし、長い道のりを経てアドバンテージを得られるようになれば、条件次第では通常の六倍近い力を発揮出来るので長期的には有利だ...」

「って六倍！？ やっぱりズルイよ、そんなの！！」

「でも、考えてもみろよ...」

近江奏矢は五人パーティーを組んでアドバンテージを得るまでに至って、本当に万を期した状態で優勝候補である姫に挑んだぜ...」

それなのに、噛ませ犬も良い所だったってことは、姫を始めとした一部の強豪にとっては、その程度の弱者優遇ルールなんて殆ど意味が無いって事だよ...」

「じゃあ、何の為にこんな回りくどいルール作ったの！？」

「それこそ、噛ませ犬にやる気を出させる為のエサに決まっているだろ...？ ここまでの優遇処置が無いと誰も強豪に挑まなくなって戦い自体が成立しなくなるしな...」

「キミってば馬鹿なのに変に鋭いよね！！」

「ふふっ、それは言い得て妙ですわね」

山田キララの言葉を聴いて香夜姫が微笑する。

「ぐっ、全然褒められた気がしない...！」

「うん、褒めてないよ！」

「お、お前ら何時か覚えてろよ...！！」

そして、香夜姫は再び話を切り出す。

「そう言った戦いの運営を行うのが、ブラフモサマージと呼ばれる者達ですわ。

神戸ではフィルムコミッショナーと言う映画撮影の招致活動が活発なのですが、戦いを映画撮影と称して隠蔽し、器物の破損や死傷者が出た際の事後処理も行っています。

また、ブラフマンの理念に心酔した彼らが作り上げた舞台では強力な集団心理が働き、自我領域が安定して発揮される傾向がありますの。

ちなみに指定された指定された時間と場所を守れない場合は即失格となりますのよ」

「ってお前...、近江奏矢との戦いに遅刻して来なかったか...？」

「あら、心外ですわね。わたくしは時間通りに行きましたわよ。ただ、あの方が対戦相手を勘違いして先に戦っていただけですわ」

「あいつ...、マジで馬鹿だよな...！」

「キミに言われるなんてよっぽどだよね！」

「うっせーよ...！！」

「そして、最終的に全ての大アルカナのカードを手にした者は、No.21『世界』の大アルカナへと至り、自我領域を無限大に拡大させ神に等しき力を得ると言いますわ」

「つまり、この世の全てを改変出来るようになるって事か…。んで、お前は何を望んでるんだ…？」

「わたくしの望み…、それはブラフマンに半旗を翻し、この戦いをぶち壊す事ですわ」

「な、なんだって！？」

「…」

それに驚いたのは山田キララだけで、双間優斗は黙って頷いている。

「この戦いはNo.19『太陽』の大アルカナである男を再び神の座に祭り上げる為のブラフマンのシナリオに過ぎませんから」

「えっ、じゃあボク達って一体なんなの？」

「都合良く使い捨てられる噛ませ犬に決まっているだろ？」

まあ、誰かの都合で操られているのは俺も同じなんだろうけど、そのあたりの事情と俺を帰せないお前の理由って奴は関係あるんだろ…？」

「ええ、その通りですわ。」

No.19『太陽』の大アルカナは前大会で神へと至り望みを叶える代償として、この世界での実体を失っていますから、今大会に出場するには器が必要となって来ます。

そして、その器として選ばれたのが双間優斗さん…、貴方なんですの」

「ちょっと待ってよ！　なんでこんな何の力も無いお馬鹿さんが神の器なの！？　それだったら、ボクやキミの方がもっともって力があるじゃない！！」

と、山田キララが横やりを入れる。

「ふふっ、遺伝的にあの方と近いと言う事もありますが、一番の理由はお馬鹿で何の力も無いから御しやすいと言う事ですわ」

「なるほど！」

「ぐっ…、言い返す言葉が無い程に納得だ…。」

やっぱり、俺が近江奏矢との戦いに巻き込まれたのも、失われた人生を取り戻す為にお前との接触を望む事も、全てはあの人達の誘導だったわけだな…」

感情を押し殺すと決めておきながら、結局は感情を利用されていた事が恥ずかしかった。

「そして、これから貴方はこの世界に絶望して、神に至る力を求めてあの方を受け入れる事になる…、それがブラフマンの描いた本来のシナリオなんですの。」

わたくしは何としてもそれを止めたいと思っています。

ですから、わたくしはあの方々に協力しながらも、シナリオの核となる貴方と接触する時を待ち続けました」

「お前は俺に一体何をして欲しいんだ…？　幾らなんでも出来る事と、出来ない事があるぞ…」

「貴方があの方を求める事が無ければブラフマンの計画は頓挫します。だから、貴方には絶望に負けない本当の強さを身につけてもらいたいと思っていますの」

「まさか、俺に勉強や仕事を頑張れって言うんじゃないだろうな…！？」

「そう、それがわたくしにとっての本当の戦いなんですわ」

香夜姫はニッコリと笑う。

「ま、まじかよ...」

双間優斗はガクンと落ち込む。

「でも、No.19『太陽』の大アルカナやブラフマンは何でそんな事をするの!？」

山田キララが素朴な疑問を香夜姫にぶつける。

「それは愛する人の幸福を願う優しさ故ですわ。あの方々の本質は真っ直ぐ過ぎる程の善人ですからね」

「じゃあ、なんでお前はそれを止めたいんだ...？」

「この世界の人々の命や運勢には絶対的な総数があるんですの。

だから、誰がどんな理由であったとしても、あるべき因果を歪めてしまえば、全く関係無い人間が応報を受ける事になります。

例えば東京の繁栄の裏側で東北で被害を受けたように、先進国の利益の裏側で後進国で戦争や餓死者が増えるように。

場合によっては世界が滅亡的な状況へと陥る事すらあります。

それを知ってまで改変を求める事は、都合の悪い現実から目を背けて、都合の良い幻想だけを追い求めるような物ですわ。

本来は因果応報を受け入れて、そこから何かを学ぶべきなんですの」

そう言って香夜姫は含みのある笑みを浮かべる。

「でも、本当はあの人達と対立したいだけかも知れませんわね。

わたくしはブラフマンこと朝日輝子と、No.19『太陽』大アルカナである朝日創真の夫婦の自分勝手な優しさを認める事は出来ませんから」

プロローグ～それは眠れない夜～

双間優斗はベッドに横たわりながら眠れぬ夜を過ごしていた。

先日意識を失って長時間寝続けたと言う事もあり、一向に眠くなる様子は無かった。

彼の為に充てがわれた部屋は風見鶏の館の二階にある寝室で、香夜姫の使っている子供部屋に次いで二番目に広い部屋である。

西面にある大きな窓からは月明かりが射し込み、古めかしい意匠が施された室内を柔らかく照らし出している。

南面には隣り合った子供部屋に通じているベランダへの扉があり、日中はその上部に設置されたガラス窓から光が射し込むのだろう。

窓を開ければ風通しも良さそうである。

昔の建物は機械に頼らなくても、自然の光や風を上手く取り込んで、常に快適に暮らせるように設計されているのかも知れない。

東京でも神戸でも文明に頼った庶民的な生活を送っていただけに、この自然と調和した屋敷は何とも贅沢で、まるで遠い世界であるかのように思えた。

言い換えると寂しいのだ。

神戸の朝日家に来た時は生活の価値観は大きく変わらず、慣れ親しんだ親戚の家と言う事もあって、そんな気持ちを感じる事は無かったのに。

風見鶏の館で迎える初めての夜だと言うのに、早くも朝日家のあの団地で過ごす日々が懐かしく思っていた。

空は一体どうしているだろうか？

酷い事を言ってしまった後に戦いに巻き込まれ、そこから顔を合わせないようにしてただけに、彼女が傷付いていないか気になる所である。

だが、もう引き返せない道を歩んでしまっている。

香夜姫と再会したいがばかりに北村教授の口車にまんまと乗ってしまい、超能力者同士の戦いに巻き込まれて命を狙われる立場になってしまった。

そして、それを仕組んだ黒幕こそが叔母の朝日輝子だと言う事も判明したからだ。

そう、全ては意志薄弱な双間優斗を依り代にして、前大会で願いを叶える代償として幽霊となった叔父の朝日創真を復活させる為の計画だったのだ。

一体叔父と叔母は最終的に何を企んでいると言うのだろうか。

彼らの本質は善人である事は疑いようが無いだけに、双間優斗や香夜姫を始めとした多くの人々を利用してまで計画を実行している事に疑問を覚えてしまう。

しかし、いくら考えても答えは出なかった。

そして、思考が停止したまま長い時を過ごし、やがて南側のベランダに通じる扉の窓が明るくなって来た頃になって、ようやく眠りにつく事が出来た。

朝食～それは新たな一日の始まり～

「起きて...、起きて下さいな...」

双間優斗が身体を揺さぶられているのに気付いて重い瞼を開けると、そこには香夜姫のほっそりとした白い顔があった。

「あ...、姫...!？」

「おはようございます、朝ですわよ」

そう言うと香夜姫は笑いながら勢い良く布団を剥がした。

「さあ、40秒で支度をして下さいな」

「ラピュタのドーラかよ...!」

風見鶏の館の寝室には聖蘭の手によって昨日の内に双間優斗の私物が運び込まれており、彼は何が何だか解らないまま寝間着から外着へと着替えた。

「ちょ待てよ...!？ 何でお前は俺の着替えを覗いている...!？ しかも、一点を注視して...!？」

「それは勿論、目の保養に決まっていますわ」

「何が勿論だよ、変態かっ...!？」

「あら、わたくしは己の欲望に忠実に生きていただけですわよ。それなのに変態呼ばわりとは心外ですわね」

「余計質が悪いわ...!!」

そして、本当に40秒で支度を終えた双間優斗は香夜姫の後を付いて行く。

辿り着いた先は二階の東側にある朝食の間だった。

東の壁一面に設けられた窓から朝日が射し込んで、室内は眩しい光に包まれているかのようだった。

その中央にある円卓には白ウサの着ぐるみパジャマを着た山田キララが如何にも眠そうに突っ伏していた。

如何にも無理矢理起されたばかりと言った様子である。

双間優斗と同じ生粋のサボリストであると思われる彼女の身体は、朝日を浴びると言う行為によって著しいダメージを受けている事だろう。

「ブルータスお前もか...」

双間優斗は思わず呟いた。

しかし、返事が無い、ただの屍のようだ。

双間優斗と香夜姫と向かい合って着席して暫くすると、メイド服姿の柊田聖蘭が現れて朝食を並べて行く。

風見鶏の館での初めての朝食は自家製パンに、ウィンナーとスクランブルエッグと言うスタンダードな内容だった。

しかし、だからこそ神戸ポークや淡路島産の卵等、地元の名産品である食材の味が際立っていて美味かった。

双間優斗達が全て食べ終わる頃になって、ようやく山田キララの目は覚めて来たようだった。

「もう、今日は土曜日でしょ？ 何もこんな早く起きなくても良いじゃない!？」

そして、第一声にして文句を垂れる。

「ああ、全く持ってその通りだな」

双間優斗も頷く。

香夜姫に起されたお陰で寝たと言う実感が全く無かった。

気がついたら朝になっていたと言った方が正解なぐらいである。

「あら、何時までも寝ていると夜眠れなくなって余計に疲れてしまいますわよ。

多少辛くても毎朝決まった時間に起きて目的を持って一日を過ごした方が、しっかりと夜眠れて疲れを残しにくくなると言われてますの。

だから、今後はどんなに夜更かしをしてもお寝坊しないようにして頂きますわ」

「ええっ、そんなのって無いよお！」

山田キララが嘆く。

遅寝、遅起きを信条とし、無気力に一日を過ごす事を何よりの至高としている双間優斗にとっても地獄のような話だった。

「しかも、何時から今日が休日であると錯覚していたんですの？」

香夜姫が双間優斗と山田キララの顔を見渡しニヤリと笑う。

「まさか...!？」

「ええ、貴方達にはこれからわたくしの仕事を手伝って頂きますわ」

「幾らなんでもいきなり過ぎるぜ...！」

「ふふふっ、何でしたら国の重要文化財であるこの屋敷の宿泊費と、地元の最高級食材を使った聖蘭さんの料理代金を支払って頂いても宜しくてよ」

「って、自分から監禁しといて中々やるよな...！」

「それが貴方達の選んでしまった道ですから諦めて下さいな」

「普通そう簡単に諦め切れるかっての...！」

そんな滅茶苦茶な事を言う香夜姫を何故だか憎めない双間優斗であった。

「ねえ、君の仕事ってまさか本当に怖い系って事は無いよね!？」

山田キララがそう思うのも当然だった。

双間優斗も香夜姫の仕事について北村教授から簡単に説明を受けていたが、あまりにも一般常識からかけ離れ過ぎて俄には信じられなかった。

「わたくしの仕事は祓魔師ですわ。簡単に言うと霊障...、つまり霊的な現象によって及ぼされる現実的な問題を解決する専門家なんですの」

「そ、それってやっぱり、アレを相手にするって事だよな!？」

「ふふふっ、何も死んでいる人間だけが対象とは限りませんわよ。

生きている人間の個人的な思念でも、集団的・社会的な思想でも、想像の産物でしかない偶像でも、動植物や自然現象でも、土地建物や非生物でも。

現実以上の存在感を持った何かが、特定の条件を満たせば霊障は発生しますから」

「やっぱり怖い系じゃないかあ！！」

山田キララが身を震わす。

「何もそんなに恐くなどありませんわよ。逆に言うとその条件を満たさない限り、人に危害は発生しませんからね」

「ちなみにその条件ってのは...？」

「あら、優斗さんはご自身で体験した事をお忘れですか？」

「...！」

双間優斗は叔父である朝日創真に自分の身体を乗っ取られた時の事を思い出す。

「そう、生きている人間に付け込んで憑依する事。または、人々の信仰や恐れを受けて具現化する事ですわ」

「なるほど、まさに幽霊の正体見たり枯れ尾花ってワケだな」

「そ、それって、どう言う事なの！？」

「つまり、霊障とは人の心の弱さが作り出す現象なんだ。

だから、例え神に匹敵する程の力を持つ幽霊だったとしても、心を強く持って生きている人間相手には手を出せないって事だ。

なんせ、この世界で実体を持って存在していないんだからな」

「じゃあ、実体化したらどうするのさ！？」

「ふふふっ、その時は気合いを入れてゴコゴコにするまでですわね」

「な、なるほど！！ 君が言うと本当に出来そうな気がするよ！！」

「ちなみに霊障によって様々な現象が発生しますが、被害を受けた人間の多くは心と現実の差異に苦しめられて、生きながらにして死んで行く事になりますわ」

「...」

それはまるで今までの自分のような状態だと思う双間優斗。

「そう、わたくし自身が生きている人を苦しめる亡霊のような存在ですから、少しでも霊障で苦しむ人を助けたい...、そう思っているのかも知れませんわね」

愛車～それは個性の象徴～

朝食を食べ終わると双間優斗は仕事に必要な道具の入った鞆を背負い、香夜姫に連れられて風見鶏の館を後にした。

そして、北野広場の前を通る石畳の路地を東へと歩く。

急な石段と大きな鳥居が特徴的な神社の前を過ぎると急に道が細くなり、お世辞にも観光向けとは言えない古い建物が多く見られるようになる。

しかし、ウィーンオーストリアの家や、うろこの家等の観光名所の近道でもある為、途中の交差点にはやけに目立つ案内板が立てられていた。

風見鶏の館から240m程直進すると細くて急な坂道に突き当たり、そこを右折して南に向かって下がって行く。

鉄筋コンクリート製のマンションばかり目に付くため、先ほどとは打って変わって近代的な雰囲気である。

そして、一つ目の信号を左折して再び東へと向かう。

それは先日立ち寄った英国館の前を通る道であったが、左右に敷地面積に対して戸数の少ない高級なマンションが立ち並び、観光地からは外れているようだった。

「で、これからどうするんだ？」

双間優斗が前を歩く香夜姫に聴く。

「ええ、現場に向かって特定土地建物定期霊視をしに行きますのよ」

それは全く持って聴いた事が無い言葉であった。

「何じゃそりゃ？」

「神戸や京都、奈良、岐阜には歴史ある古い建物や、日く付きな土地が多い事は知っていると思いますが、そういう所では霊障が発生しやすいんですの」

「まあ、そうだろうな」

先ほど通って来た古くさい路地は勿論の事、風見鶏の館にその手の現象が発生すると言われても不思議では無い。

「そこで特定の土地建物を対象にして霊障の発生を未然に防ぐ為に、資格を持った祓魔師が定期的に霊視を行って役所に報告する事が条例で定められたんですわ」

「それが特定土地建物定期霊視って訳か。でも、そんな胡散臭い定期業務は聴いた事ないし、ちゃんと守っている人なんているのか？」

「対象となる土地・建物の所有者には役所からお知らせが行きますの。

それで報告の義務を怠ったり、虚偽の報告をした場合は300万以下の罰金、または5年以下の懲役が課せられる事になってます。

定期霊視を行わなかった物件で事故が発生して、因果関係が立証されないまま裁判で負けて、実際に求刑されたって例もあるみたいですよ。

だから、皆さん無駄と思いながらも仕方無く行っていると言った感じですよわね」

「本当にこの国は余計な法律ばかりで腐ってやがる。

どうせ業務を統括する外郭団体が作られて、いちいち免許を更新したり、報告するのに手数料を取ったりして、天下りの巢窟になっていたりするんだろ？」

「ふふふっ、概ねその通りですわ。

でも、そのお陰で悲劇を未然に防いでいるのも事実ですよ。

それにわたくし達のような特殊な職業の人でも、定期的な収入を得られるようになったのですから文句は言えませんわね」

「それで、俺は一体何をすれば良いんだ？」

言っとくけど俺は一切の特殊能力を持ち合わせていないし、お前らのようなファンタジックな戦いを期待されても無理だぞ」

「ふふふっ、取り敢えず貴方にはメモや霊視結果の記入等、今迄聖蘭さんがやっていた仕事の一部を覚えて頂きますわ」

「ああ、そいつは大いに自信が無いな。

記入するのは誰にでも出来る簡単な仕事のようにも見えるが、現状を正しく理解していないと要領良くこなせはしないと思うんだ。

下手すればお前が作業しながら自分でやった方が高率的かも知れないぞ。

俺は得意じゃない事は無理にやらず、得意な人がそれを活かした方が良いと思っているからな」

「あら、貴方は自分の人生それで良いと思っているんですの？」

今から出来ない事を避けていたら、何一つ出来ないまま大人になって、何一つ成し遂げる事が出来ずに一生を終えてしまいますわよ」

「ぐっ...」

それは自分自身が心の何処かで感じていた事だけに言い返す事は出来なかった。

「それに例え上手く出来なくても、自分自身ですることに意味がある物もあるんでなくて？」

暫く進むと視界が開けて新神戸の駅前に出る。

新神戸駅は山陽新幹線と地下鉄の北神急行線・西神山手線に乗る事が出来るのだが、すぐ裏には六甲山が聳えていて建物も少ない為に最果ての地のようなイメージがある。

目立つ建物と言えは航空会社の名前を冠したホテルぐらいだ。

どうやら、ホテルの他に店舗や劇場等がある複合施設となっているらしく、新神戸のランドマーク的な存在なのかも知れない。

なによりも建物の下を通っている山麓バイパス出口のトンネルがインパクト抜群だ。

山麓バイパスは六甲山を東西に横断する有料道路だ。

神戸には六甲山を楽にパス出来るトンネルや道路が幾つもあるが、便利な道は何処もかしこも有料と言った印象であり、双間優斗のような学生には縁がない存在である。

双間優斗が香夜姫に連れられて辿り着いた先は複合施設の中にある駐車場の月極エリアだった。

「ここがわたくしのガレージですわ」

「ガレージって言うか、むしろ普通の駐車場だろ？」

「京都を初めとして関西では駐車場をガレージやモータープールと呼称する事があるんですよ」

「それは知らなかったな」

月極駐車場、もといガレージには沢山の車が駐車されているが、異質な雰囲気を持つ高級輸入車が二台あった。

ランボルギーニのディアブロとロールスロイスのファントムである。

何れも漆黒のボディカラーで価格帯が飛び抜けた車であり、悪魔やら亡霊と言った怪物系の名前を冠している共通点を持つ。

「この二台がお前の車じゃないのか？」

「あら、良く解りましたわね」

「そりゃ、解るだろ。どう見てもお前っぽいし」

「でも、残念ながらわたくしの車はそれだけじゃありません事よ」

「んっ...？」

「言いましたわよね、ここがわたくしのガレージだと」

「ま、まさかここにある全ての車がお前の車だって言うのか？」

「ふふふっ、当然ですわ」

「マジかよ...」

双間優斗は改めて周囲を見渡す。

トヨタのAE86型トレノやA70型スープラ、ST185H型セリカ、AW11型MR-2。

ニッサンのS13型シルビアやZ32型フェアレディZ、R32型GT-R。

ホンダのBA型プレリュード、DC2型インテグラタイプR、NA1型NSX。

マツダのFC3S型RX-7、NA6型ロードスター。

スバルのGC8型インプレッサSTIタイプR。

いずれも80年代から90年代に発売されたツードアクーペボディを持つ国産スポーツカーであった。

良い車ではあると思うが疑問符があった。

「なんか、お前の趣味と違うよな」

「ええ、元々お父様のコレクションだったのを引き取ったんですの」

双間優斗は叔父の朝日創真が日本製スポーツカーのコレクターであったという話を思い出して香夜姫の正体を確信する。

「なあ...、お前ってやっぱり、子供の頃に死んだはずの月夜なんじゃないのか...？」

「いえ、貴方の従妹だった朝日月夜は確かに死にましたわ。今のわたくしは偽りの生を受けた、本来この世界に存在するはずの無い亡霊のようなものですの」

「ああ、月夜は一度は死んだのは確かだろうな...」

「だけど、1999年に開かれたって言う前大会...、あれで神に至った叔父さんが自分の命と引き換えにお前を生き返らせたんじゃないのか...？」

「さあ、どうでしょうか？ それよりも、今日仕事で使う車を選んで下さいな」

どうやら、香夜姫はこれ以上、その話をするつもりは無いらしい。

「お前が自分で選べばどうだ...？」

「あら、これから仕事では貴方が運転するんですから、ご自身で決めて下さいな」

「マジかよ...」

ふと、香夜姫の趣味とは明らかに違う真っ赤なボディカラーを持つ真新しい国産スポーツカーが目にとまる。

スバルと共同開発され今年発売されたばかりのトヨタ86である。

水平対抗の自然吸気エンジンを低い位置にマウントし、今時珍しいスタンダードな後輪駆動形式を採用して話題となっている。

実物を見てみるとデザインがかなり立体的だ。

鋭い逆三角形のノーズを中心に左右に張り出すようなフェイスを持つ為、コンパクトなボディに反してズッシリとワイドに見える。

滑らかなボディラインも相まって何処から見ても美しい。

また、多少のカスタムが施されているようだ。

フロントバンパー下部にはスポイラー、トランクにはGTウィングが装着されているが、双方共に艶々とした質感の高いカーボン製である。

ボディの中央には二本の白いセンターラインが入れられ、ホイールはポリッシュ加工されたリムの深いツーピースでスポークは金色で細いデザインになっている。

それによって、よりコンパクトでロー&ワイドな雰囲気演出されているようだ。

更な適度にローダウンした上でホイールオフセットをフェンダー幅に合わせて調整しているらしく、各種クリアランスが適正で純正以上に車としての完成度が高く感じられる。

「これは...？」

「その車はお父様が生きていたら、お母様に叱られてでも収集したと思うので、思い切って購入してみたんですの」

「なるほど、カスタムやカラーリングも含めてそれっぽい気がするな...」

双間優斗の心は決まっていた。

「よし、これにする...！」

それを聞いた香夜姫は嬉しそうに微笑みながらキーを彼に手渡した。

運転～それは楽しみの創造～

双間優斗と香夜姫を乗せたトヨタ86は新神戸を出て、低層マンションや一階部分が商店となった一戸建てが建ち並ぶ住宅街の道を東へと走る。

助手席に座る香夜姫が案内してくれるらしいので、双間優斗は自分で運転しながらも行き先を知らない。

今走っている片側一車線の道路は神戸の海側では一番北側にあり、西は新神戸から、東は双間優斗の大学付近までを繋いでいるはずだ。

バス停や信号が多くて時間がかかる印象があるので双間優斗は滅多に使わない。

もし、使うとしたら叔母のレクサスCT200hを借りて、遅刻しそうな朝日空を学校に送って行く時だけだ。

確か彼女の通う学校は新神戸と大学のちょうど中間地点、阪急神戸線の王子公園駅付近にあったはずだ。

しかし、86の太くて手にフィットする形状のステアリングは、ずっしりとした感触で一見安定しているかのように思えるが、気がつくとも左右に流されている事がある。

また、クラッチは軽くて操作しやすいが、1速から2速のシフトアップする時に回転が合いにくく、シフトチェンジの際に車体が大きく揺さぶられる。

何よりも気になるのが路面からの突き上げが激しく、運転している双間優斗はとにかくとして、助手席に乗っている香夜姫の顔色が気になる。

ふと、信号待ちで止まった時に香夜姫の顔を盗み見るが、彼女は何時もと変わらず通り涼しい微笑みを浮かべ続けて、何を思っているかを窺い知る事は出来ない。

手を伸ばせば届く距離にいるのに何処迄も遠い存在のように感じる。

おそらく、彼女は旭陽創真と輝子の娘であり、空の姉であり、双間優斗の従妹で初恋の相手であった朝日月夜である事は確かだ。

そして、叔父の朝日創真が自分の命を犠牲にして、彼女を生き返らせたと言う推理も間違っていないはずだ。

それから先の彼女はどのような人生を歩んで来たのだろうか。

自分自身の記憶や、朝日空の反応を見る限り、朝日月夜の死に関する事実関係の改ざんはされていないようだ。

それ故に朝日月夜は死んでいるのに生きている人間...、香夜姫として第二の人生を歩まざるを得なかったのかも知れない。

他の子と同じ様に学校にも通えずに。

たった一人で。

孤独に。

双間優斗も生きているのに死んだような人生を送っていただけに、彼女の気持ちを想像すると胸が痛くて仕方無かった。

そう考えると彼女が実の父と母に対して確執を持ち、その計画を阻止しようとするも願けてし

まう。

そんな、彼女の為に自分が出来る事は無いかと双間優斗は考えてみたが、短い時間でそう簡単に思いつくものでは無かった。

少なくとも勉強や仕事を頑張る事では無いとは思う。

「青ですわよ」

「あ...」

慌てて発進しようとしてエンストし、後ろからクラクションが鳴り響く。

「ふふっ、優斗さんったら本当に運転が下手ですね。わたくしが身体を鍛えていなければ酔っている所でしたわ」

「いや、この車が運転しにくいんだってば...！」

「あら、そうやってすぐに言い訳するのは見苦しくよ」

そのやり取りに既視感を覚えた双間優斗は思わず吹き出す。

「ぷっ、お前ってビックリする程に空の奴と同じ事言うのな...！」

「そうなんですか？」

「ああ、叔父さんのモンスターに二人乗りしてメリケンパークの駐車場に行く時にボロクソに言われた」

「それは近江奏矢と戦った時の日ですわね」

「って言うかそれっきりバイク置きっぱなしだったな...。すっかり忘れていたぜ...」

「バイクは後で聖蘭さんに言って回収させますわ。彼女も車やバイクが好きなので、喜んで運転して帰って来てくれると思いますわよ」

「そりゃ助かるけど、バイク運転するメイドさんってスゲエな...！！ クールな顔して中々やるな...！！」

「ええ、間違い無く貴方よりも運転は上手ですわよ」

「ぐっ...、それは言ってくれるなよ...！ 俺だって普通の車やバイクはマトモに運転出来るんだぜ...！！」

「それはスポーツ車の運転に必要なものが解っていないからですわ」

「必要なもの？」

「それは運転を楽しむ事ですよ。もともと、スポーツの語源は古いフランス語の気晴らしをする、遊ぶ、楽しむって意味のdesportであると言われてますしね」

「何事も楽しむってか...、それも前に空に言われたっけな...。もう感情を隠すのは止めようって、過去に縛られずに今を大切にしていこうってな...」

「あら、それで貴方は何て答えたんですの？」

「ああ、俺の事を何も解ってないって突き放して、アイツを泣かしてしまったよ...」

そして、その話がきっかけで彼女に酷い事をしてしまい、それ以来まともに顔を合わせていない。

「ふふっ、それは泣かれて当然ですわね」

しかし、表情を暗くする双間優斗を香夜姫は笑う。

笑って済ましてくれる...、ただそれだけで双間優斗は心が軽くなるのを感じた。

「ふっ、実を言うと恐かったんだよな...。どんなに楽しくても何時か絶対に終わりが来るし、心を開いてその時に辛い思いをしてしまうのがさ...」

双間優斗は自然と本当の気持ちを話していた。

「あら、わたくしは終わりがあからこそ人生は素敵なんだと思いますわよ」

「ん...？」

「だって、永遠に辛い日々が続くとしたら人生が嫌になってしまいますし、永遠に楽しい日々が続くとしたらそれを大切にする事も出来ませんもの」

「お前って意外とポジティブだよな...」

「誰よりも終わりについて真剣に考えているだけですわ。そして、今を精一杯楽しんで最後に笑いながら別れる事が出来たら満足ですの」

「そいつは良いな...。でも、俺は何時も解らない事への不安で一杯で、今を楽しむ余裕なんて無いぜ...」

「ふふふっ、貴方のように身の前をわきまえずに漠然と生きていれば不安でしょうね」

「じゃあ、どうすりゃ良いんだ...？」

「簡単じゃありませんこと？ どんなに大きな問題も身の丈で考えて、出来る事をひとつひとつ積み重ねて行けば良いだけですわ」

「そんなもんかね...？」

「そんなものですわよ。案ずるより産むが易しと言いますし、大抵の事は成せば成りますしね」

「って言うより、お前の場合は力づくでどうにかするって感じだろ...？」

「あら、よく解ってるじゃありませんの」

「まあね...！」

双間優斗の気分が高揚してきた為か運転にリズムが生まれていた。

軽快な鼓動を響かせながらアクセルワークに対してダイレクトに路面を蹴り出し、子気味良くシフトアップして滑らかに加速して行く。

さほどスピードは出ていないものの、メリハリの効いた運転によって、あれだけ硬かったサスペンションは嘘のようにしなやかに動くようになっていた。

自分の思いに車が応えてくれる。

その感覚を一言で表すならば気持ちが良いと言う他なく、仕事さえ無ければ何時までも何処までも乗っていたいと思わせる。

双間優斗はトヨタ86と言うこの時代に生まれたスポーツカーが好きになっていた。

「ふふふっ、随分とお上手になりましたわね。あ、そこ斜め左方向ですわ」

新神戸の駅から1km程進んだ所にある小さな五叉路を香夜姫の指差す方向に進む。

その道が傾斜した道には二階建てから三階建ての小さな一戸建てが多く、マンションは殆ど見られない感じである。

そして、700m程進んだ所で香夜姫が言う。

「今日の現場はここですわ。左に曲がってすぐ右が駐車場になっているんで、そこに車を停めて

下さいな」

その場所に双間優斗は見覚えがあった。

「現場って...、ここは空の学校じゃないか...！！」

「ええ、神戸は大震災以降未成年者による異常犯罪が増えた為、全ての学校施設で特定土地建物定期霊視が実施されるようになったんですの」

「いや、そうじゃなくて空と顔を合わせたらマズいだろ...！？」

双間優斗は強い口調で文句を言いながらも、学校の手前にある急勾配の細い路地を左に曲がる。

「アイツは基本的には帰宅部だけど、色んな部活動にヘルプで参加してるから、土曜日でも登校している可能性は高いぜ...！！」

そして、路地の右側にある近代的な鉄筋コンクリート造の体育館前、石畳の舗装がされた広場に車を停めた。

「あら、優斗さんが気まずい以外に問題はありませんわよ」

そう言うと香夜姫は助手席のドアを開け放ち、サイドシルに手を付きながら華麗に車を降りる。

「貴方が住み込みで仕事を手伝う事はブラフマンのシナリオにも織り込まれていて、空さんを始めとした関係者には特別研修であると説明が行っているはずですから」

双間優斗は香夜姫に続いて車を降りる。

「それで実際に大学の単位も習得出来るように計らわれていますし、貴方は正々堂々と職務を全うすれば良いんですの」

「そうは言ってもなあ...」

「さあ、何時迄もグチグチ言っていないでいきますわよ」

納得が行かないまま双間優斗は香夜姫の後を追って再び細い路地に戻り、木々に囲まれひんやりとした坂を登って行く。

途中、右側に生徒達が部活動をしているグラウンドが見える。

その生徒の中にソフトボール部のユニホームを着て練習に励む青みがかったショートカットの少女の姿があった。

間違い無く従妹の朝日空その人である。

「ほら...、やっぱり居ると思ったんだよな」

双間優斗は思わず呟いた。

彼女はと言うと練習に夢中で双間優斗達には気付いていない様子である。

「ふふふっ、ずいぶんと空さんの事を解っていらっしゃるんですね」

「まあ、アイツは単純だから行動が予測しやすいしな。それより、見つかる前にサッサと行くでしょうぜ」

双間優斗はそそくさと歩みを進める。

そして、更に少し坂を登ると目の前に西洋の城を思わせる趣きの校舎が現れる。

正面の玄関と思われる部分は石貼りの意匠になっていて、左右にアーチ状の二つの出入口が空

いている。

その上の二階部分には縦に細長い観音開きの窓が並んでいて、更に三階部分にはディズニーのお姫様が顔を出して歌いそうなバルコニーが設置されている。

更に壁面の両端や、屋上に見える塔屋には円筒状の小塔が突出しているのが特徴的だ。

しかし、それ以外の部分はモルタル仕上げの至って普通の鉄筋コンクリート造の校舎と言った感じであった。

「実際に校舎を見るのは初めてだが随分と立派なもんだな...！」

「世界大戦時には陸軍の司令部として使用され、敗戦後には昭和天皇も宿泊し、阪神淡路大震災をも耐え切ったと言う歴史があるそうですわ」

「そのわりには結構新しい...、って言うか本物の持つ重みが無くて、まるで安っぽいアミューズメントテーマパークみたいな感じだ」

「近年になってロンドン塔と呼ばれる玄関周辺や塔屋等の一部を除いて、解体されて建て替えられたんですの」

「なんか、勿体ないよな」

「安全基準が厳しい日本は古い建物を維持するのに莫大なお金が掛かるので、希少な価値があっても結局は建て替えざるを得なくなると言うのが現実のようですね」

「日本は災害が多くて必要な部分もあると思うが、それ以上に建築会社の需要を守る為ってのもありそうだな」

「相変わらずうがった見方ですけど、そう言う側面も確実にありますわね」

「やっぱりな」

「では、仕事を始める前に事務室に挨拶に向かいましょう。仕事の道具の入った鞆を忘れずに持って下さいね」

歩く～それは地に足を着けて～

「うわぁ、今日は何時ものメイドさんでは無く、若い男性がご一緒なんですねー！」

本館にある事務室で対応してくれた担当者は若い女性だった。

双間優斗や香夜姫からすると若干年上で、大学を卒業したての初々しい新人と行った感じである。

「ええ、この方は双間優斗さん。大学の研修の一環として、今日からわたくしの元で働いて頂く事になったんですの」

「よろしくお願いします...」

双間優斗は香夜姫に促されて頭を下げる。

「じゃあ、将来の従業員、まさにお弟子さんみたいなものですねー！」

「ええ、いずれはわたくしの跡を継いで頂けたらと思っていますわ」

そう言って香夜姫は双間優斗を見て微笑んだ。

「マジかよ...、そいつは冗談キツイぜ...！」

流石に本気では無いとは思いますが、何もかもぶっ飛んでいる香夜姫の事だ、巫山戯て言っているとは限らないのが恐ろしい。

「ふふっ、将来有望そうですねー！ でも、私と殆ど変わらない年齢で起業して、お弟子さんまで取るなんて憧れちゃいますよー！！」

担当者は口ではそう言うが、絶対に心から思っていないだろう。

そもそも、霊視や除霊等の胡散臭い仕事や、それに従事する見るからに年下なのに偉ぶった小娘に対して、良識ある人間ならば好意を向ける事は無いはずだ。

「誰だってその気になれば出来ますわよ。

人が歩みを止めるのは遠い所を見て、物事を難しく考えてしまうからですわ。

取り敢えずは地に足を付けて自分に出来る範囲で歩み出し、目の前にある問題を一つ一つ解決しながら進んで行けば案外どうにかなると思いますわよ」

担当者のお世辞に対して本気で応える香夜姫。

それは見るからに適当に生きている彼女に対しての当て付けか、それとも単に空気が読めないだけか、香夜姫の考えは計り知れない。

「へえ、そう言うものですかねー！ じゃあ、今日は何方の建物に行きますかー？」

「ええ、今迄複数回に別けて霊視を実施して来た為、今日は最後に残った本館を回るだけですわ。何時ものように屋上や各教室の鍵の手配をお願いしますの」

「はい、わかりましたー」

「それと、定例ではありますが簡易的なヒアリングをさせていただきますわ」

そう言うと香夜姫はふわりとしたスカートをたくしあげ、そこからA4サイズのバインダーを取り出す。

「おまっ...！！ 今、何処から出したよ...！？」

「あら、レディーにそれを聴きますの？」

そして、香夜姫はバインダーを双間優斗に手渡す。

そのほんのりと熱を帯びたバインダーにはA4サイズの印刷物が挟まれており、表紙にはこの建物や所有者、管理者の名前や住所が記載されていた。

下の方には代表となる霊視者として香夜姫の名前や住所、資格の種類や番号が書かれている。

2頁目には建物用途や敷地・述べ床面積、測定箇所が何ポイント、問題となる霊障の有無等の概要が書かれているようだ。

「定期霊視のやり方は完全にマニュアル化されていて、その表に記載された調査事項に沿って確認しながらレ点を入れて行く事になるんですの。

まず始めに現地担当者への聞き取り調査を実施しますから、3頁目を開いて質問事項の結果を記入して下さいな」

「ああ...」

ヒアリングの内容は死亡事件や怪奇現象、精神的や行動に問題のある人物、虐めの有無等であった。

今回調査を実施する本館部分は近年改築を受けているとは言え最も古く、様々な歴史がある事は事実であったが、今現在問題となる事項は確認されなかった。

「では、これから現地調査を実施しますわ」

「はい、こちらが本館の鍵になりますー。もし、何らかの問題が確認された場合は、追加料金を支払いますんで、その場での解決をお願いしますねー」

そして、担当者から木のプレートに取り付けられた鍵束を受け取ると、現地調査を実施する為に事務室を後にする。

「にしても、イジメは勿論の事、何の問題も無い...、ってか...。如何にも学校関係者が言いそうな事だぜ...」

「ええ、ヒアリングで問題が確認される事は滅多に無いんですけど、実際に現地で霊視すれば解る事ですわ。

まずは屋上から始めて順番に下がって行きましょう」

玄関付近にある階段を上がり塔屋から屋上に出ると、グラウンドから喧騒が聞こえて来た。

「なんで自分で選んだ事なのにやる気が無いのっ？！

そんなにめんどくさいならば、やめちゃえば良いでしょ！！ みんながんばって生きてるのに貴女みたいなのが居ると迷惑なのよ！！」

どうやら、ソフトボール部の上級生と思われる生徒が、練習に身が入っていない下級生を叱っているようだった。

「まあまあ、先輩の言う事もごもっともやけど、誰にだって事情ってもんがあるはずやから、もうちょっと様子を見ても良いと思うよ」

そして、見かねた空が二人の仲裁に入る。

「まったく、空の奴は学校でもおせっかいだな...。

いや...、アイツの事だから、わざわざ問題のある部活に参加して、助けに入っているって可能性もあるな...」

「あら、そんなに彼女の事が気になるんでしたら後で声を掛けたらどうですか？」

香夜姫は双間優斗を揶揄うように笑う。

「勘弁してくれよ…。んで…。実際どうやって仕事を進めて行くんだ…？」

これ以上、朝日空の事で弄られたくない双間優斗は話題を変える。

「貴方の持っている鞆の中から電磁波測定機を取り出して下さいな」

「これか…？」

双間優斗が背負った鞆から取り出したものは手のひらサイズの四角い機械で、下の方にモード選択のダイヤル、上の方にメーターが取り付けられていた。

「そのダイヤルをMagneticの1～100ミリガウスレンジに合わせて、各部屋で電磁波を測って結果を表に記入して行くんですの」

双間優斗が先ほど渡されたバインダーを開き、使用機器や調査日、部屋名に測定値、異常の有無のチェック欄等が表記された頁を表にする。

「これか」

「ええ、基本的には一部屋一カ所の測定で良いのですが、事務所ビルや講堂等で部屋が大きな場合は、大凡500平米毎に区切って計測しますわ。

確か建築基準法で500平米毎に防煙・防火区画が必要となっているはずですので、それを目安にすると良いと思います。

もしそれで、地区の平均値より科学的な理由が無く上回った場合は、原因を推測して解決方法を提案する事になりますの」

「なんか、さっきから全然霊能力とか関係無い感じだな」

「霊能力と言うのは人によって大きな差が出るものなので、誰がやっても平均的な結果が得られるように主観が入り込む余地を減らしているんですの」

「じゃあ、資格を取れば何の力も無い俺でも出来るって事か？」

「ええ、霊障とは原因があって結果のあるものですから、一定以上の知識と経験が認められれば誰だって資格を取って霊視や除霊をする事も可能ですわ」

「ますます、霊能力は意味ないな」

「いえ、そうでもありませんの。わたくしのように霊能力の有効性が認定された資格者は、測定器や調査の代わりに自分の感覚を使って業務を行う事も許されてますから」

「どう考えてもそっちの方が楽そうじゃないか？」

「ええ、でも仕事の流れを説明するには不向きなので、今回は手間がかかっても基本的なやり方で行こうと思いますわ」

「そりゃ、わざわざご苦労な事で」

救済～それは生きながらにして生まれ変わる～

双間優斗は香夜姫の指導の元で各ポイントで電磁波の測定をして行く。

電磁波測定器は珍しい機械ではあるが、一度レンジを合わせてしまえば後はメーターを読み取るだけなので、作業自体はそんなに難しい事では無い。

だが、全ての部屋に立ち入りながら広い校舎の隅々まで歩いて行くのは、運動不足気味な双間優斗にとっては相当骨が折れる事であった。

特に複数ある階段の全てを巡るのは大変としか言いようが無い。

一緒に歩いている香夜姫は普段から業務をしているだけあって余裕綽々で、その涼しい表情を崩す事は無い。

もっとも、激しい戦闘すらも楽々こなす身体能力を考えれば当然の事かも知れないが。

「まったく、疲れるぜ...」

そして、三階のロンドン塔のバルコニー付近にさしかかった時、双間優斗は思わず足を止めて溜め息を付いた。

「あら、人によって労働程度の差はあったとしても、時間を対価にしてお金を稼いで行くのは当たり前ですわよ」

「別に俺は人生を高望みしているわけじゃないから、もっと楽なバイトでもして最低限の金だけ貰えば良いんだよ...」

なんだったら、生活保護でも良いなんて思ってるぐらいだしな...」

「ふふふっ、本当にそう思っているんですの？」

香夜姫は妖艶に微笑みかける。

「な、なんだよ...!？」

「自分の気持ちに嘘を付かなくても良いって事ですわよ。貴方はあの車を欲しいと思っているんじゃないくて？」

「まあ...、そりゃ欲しいよ...! けどな、車なんてそう簡単に買えるものでもないだろ...!？」

「理解が早いのが貴方の素晴らしい所ではありますが、初めから出来ないと諦めてたら夢は決して現実にはなりません事よ」

「そうは言ってもな...」

「先ほどの話にもありましたが、大きな目標を達成するには、自分に出来る事で具体的に考えてみれば良いんですの。

例えばわたくしが貴方にあの車を250万で売るとしましょう。

それを一括で購入するのはあまりに難しい事ですが、もし無金利で72回払いで返して頂けるならば、月々約3万5千円の支払いで手に入りますわよ。

更にわたくしの仕事を手伝って頂けるならば、駐車場代や保険、現場に必要なガソリン代は経費で落とす事も出来ますしね」

「って、結局お前の仕事続ける事前提かよ...!」

「もっとも今使っている月極駐車場代は2万円程ですし、大人の方から等級を引き継げば保険も安くなりますし、ご自身で諸経費を負担するのも不可能で無くてよ」

「想像していたより意外と現実的なんだな。ちなみに消耗品なんかはどうなんだ？」

「軽量で重量バランスに優れたボディでタイヤやブレーキの負担が減っている分、一般乗用車に近いパーツを使っている為、他のスポーツカーと比べて安いと思いますわ。

「ノーマルのエンジンで普通に乘っている限りでは、純正相当の低粘度オイルでも壊れると言う事はありませんしね」

「なるほどな！」

「真面目に働けば車を持つ事も夢じゃありませんわ。そして、車に乗る事を楽しみにして仕事を頑張れば良いと思いますの」

「うまく乗せられた感じはするが、やる気が出て来た事は確かだ！」

「そうやって生活の中に楽しさを作り出して行くのが、より良い人生を歩む為の秘訣ですわ」

「お前さ...、始めから俺を励ますために、あの86を用意したんだろ...？」

「あら、どうしてそう思うんですの？」

「そりゃ解るさ...。お前は根本的な所で空にソックリだし...」

「ふふふっ、あんなお子様と一緒にされるとはわたくしも地に落ちたものですわ。でも、不思議と悪い気はしませんわね」

「でも、どうしてお前達はそこまで俺にしてくれるんだ...？」

「空さんはどうか知りませんが、わたくしは自分自身の罪滅ぼしもありますわ...」

「...」

双間優斗はその言葉を聴いて何故だか悲しくて涙が溢れそうになった。

香夜姫はそんな彼と向き合って手を取る。

「でも、それ以上に優斗さんには幸せになって欲しいんですの。貴方が何よりも大切に、何よりも大好きですから」

その菩薩のような微笑みに双間優斗は我慢が出来ずに声を殺して泣いた。

もう、長い事泣く事なんて出来なかったと言うのに。

「貴方はもう自分を殺し続けなくても良いんですよ...。わたくしが...、わたくし達が貴方を許してあげますから...」

香夜姫はその震える身体を柔らかく抱き締め、赤ん坊をあやす様に上下する背中を優しく叩いた。

そして、人目を憚らず嗚咽を零した。

それからどれだけの時間が経っただろう、香夜姫から渡されたハンカチで涙を拭った双間優斗は微笑みかけた。

「ありがとう...、お前のお陰で気持ち楽になったよ...！」

彼女に素直に感謝を告げるその顔は晴れやかで、まるで生きながらにして、生まれ変わる事が出来たかのようなようだった。

憑物が落ちるとはこう言う事を言うのかも知れない。

「ふふふっ、どういたしましてですわ。

でも、貴方がお礼を言わなければならない方は、他にもいらっしゃると思いますわよ。

その方が貴方を身近な所から支え続けて、貴方の心の扉を開きかけていたからこそ、今の貴方があるんですから」

決意～それは奇蹟をその手で～

双間優斗はそれまでとは打って変わって勢力的に仕事をこなし、午前中いっぱいを使って本館の全ての箇所での測定を完了する。

結果、とある三年生の教室と一年生の教室、それから事務室で高い数値が確認された。

中でも三年生の教室は霊障の恐れがある危険な数値の為、再度赴いて詳細な調査を実施する事となった。

「わたくしはこの教室の使用者名簿や座席表を準備して来ますから、その間に優斗さんは更に細かく測定して霊障の発生源を絞って下さいな」

「一番数値が高い場所がそうなるのか...？」

「ええ、頼みましたわよ」

「ああ、任せてくれ...！！」

やる気に満ちてそうは言ったものの、確実に霊障...、つまりは心霊現象があると解っている場所に取り残されるのは心細いものである。

もし何か起きたとしても仮にも、その道のプロで圧倒的な戦闘能力を有している香夜姫と一緒にあれば対象も出来ようが、素人である双間優斗にはいかんともし難い。

オマケにこの教室からは異様な雰囲気を感じていた。

見えない誰かが何処からかこちらの様子を伺いながら、負の感情を向けているように思えてならなかったのだ。

真っ昼間で温かい陽の光りが射し込んでいると言うのに背筋が凍るかのようだった。

双間優斗は自分には優れた靈感は無いと思っているので、おそらくは知識や経験、実力が無い故に、解らない事に対して必要以上に警戒してしまっているのだろう。

そう、人間にとって未知とは何よりも恐怖であるのだ。

それを頭で理解して冷静に仕事をこなそうとしても、心臓は早鐘を打ち身体が震えて思うように動かない。

何度、同じ事を繰り返したかは解らないが、教室中を隈無く測定した所、明らかに突出して高い所が見つかった。

何の変哲も無い木製の机と椅子が置かれた生徒の席だ。

「ここか...」

その時、何も無いのにガタっと言う音がして振り向くと、そこには昏く俯いた女子生徒の姿があった。

「！？」

緊張感は一気に高まる。

しかし、真偽を確かめるように目を見開いて瞬くをすると、その姿は幻であったかのように消えていた。

「見間違いか...？」

だが、次の瞬間、目の前にそれは迫っていた。

「なんで自分で選んだ事なのにやる気が無いのっ?!」

まるで空耳のような声だった。

双間優斗は彼女の姿と言動に覚えがあった。

そう、先ほど朝日空と一緒に居たソフトボール部の上級生だった。

「そんなにめんどくさいならば、やめちゃえば良いでしょ!! みんながんばって生きてるのに貴方みたいなのが居ると迷惑なのよ!!」

そして、彼女は人間とは思えない力で双間優斗の首を絞める。

「ぐっ...!!」

双間優斗は慌てて自分の首に食い込む細い指を解こうとするが、それは質量を感じさせないエネルギーのようで、まるで霞を掴むように不確かな感じであった。

このままじゃ殺されてしまう。

そう思った時だった。

恐怖よりも何よりもワケも解らずに一方的にやられている事に腹が立ち、目の前の陰気な顔面に向けて思いっきり拳を叩き込んだ。

「巫山戯るんじゃねえ...!!」

何とも言い難い悪寒が全身にまとわりつくが、双間優斗は重くなった自分の肩を祓い、身震いさせてそれを振りほどく。

「霊障だかなんだか知らないが、いきなり首を絞める奴があるか、馬鹿...!!」

双間優斗の挑発に激昂したそれは再び襲いかかって来る。

「まったく、生霊に向かって罵倒しながら殴り掛かるとは非常識なお方ですわね...!!」

しかし、目にも止まらぬスピードで教室に飛び込んで来た香夜姫がそれを勢い良く蹴り倒した。

「お前にそれは言われたく無いな...!」

二人の攻撃を浴びせられて突っ伏すそれは、先ほどに比べると明らかに存在感が弱くなっていた。

「で、これが霊障って奴か...?」

「正確に言うと霊障になり掛けの人間が残した思念って所ですわね。

貴方のように感受性が鋭い人間は環境による影響を受けやすく、様々な感覚を具体的な形として認識してしまう事があるんですの。

今はまだ心が弱く恐怖への過剰反応に過ぎませんが、心を強く持って感覚を磨いて行けば、立派な靈感として昇華すると思いますわ」

「なるほどね...、靈感って奴は解らないものを的確に想像する力って事か...」

「ええ、そう言う事ですわ」

双間優斗は自分自身に靈感の素養が無いとだけ意外であった。

「さて、この方の対処を考えないといけませんわね。かなり追いつめられた感情を感じますし、霊障が発生するのも時間の問題ですから」

双間優斗は心が掻き乱されないように注意しながら思念に目をやるが、香夜姫が言うように辛

い表情を浮かべて思い詰めた様子であった。

「霊障ってのは人の心が何かに負ける事によって発生する...、つまり、現実問題として何らかの事件を起こすって事だよな...？」

「そう言う事になりますわ」

「可愛そうにな...。誰だって辛い思いをしたくて...、追い詰められたくて生きているわけじゃあるまいに...」

双間優斗は彼女に自分自身の姿を重ねて見てしまう。

ある意味で双間優斗も朝日月夜と言う亡霊に憑かれながら生きて来て、一步間違えば人としての心を失い道を外れていたかも知れないからだ。

「それを救うのがわたくし達の祓魔師の仕事ですわ」

「でも、どうするんだ...？」

「もし、完全に心を失っているなら力技で憑物を祓うしかありませんが、そうなるに至った原因は残ったままなので根本的な解決には至りません。

ですが、幸いにも彼女はそこまでには至って居ませんから、しっかりと対話をして心の問題を一緒になって解決するのが良いと思いますわ」

「なんだか、カウンセラーみたいだな...」

「ええ、根本的には大差ありませんわ。でも...、残念ながらそう簡単には行きそうもありませんわね...！！」

その時だった。

突っ伏していた思念が暴れ出した。

彼女の力によって机や椅子等、教室中のありとあらゆる物が重力に逆らって滅茶苦茶に飛び交い、まるでポルターガイストのようになった。

「これは...！？」

「どうやら、本人の心が限界に達して苦しんでいるようですわ...！」

香夜姫はスカートからロープを取り出し暴れる思念を縛り上げる。

「今直ぐにでも彼女を助けたいのは山々ですが、このまま思念を放置すれば二次被害が発生しかねませんわね...！！」

「そんな...！」

何故、彼女ばかりが辛い思いをしなければならないのだろう。

同じ様に生きる事に苦しみながらも、双間優斗が道を踏み外す事が無いのに対し、彼女は道を踏み外そうとしているのだろうか。

双間優斗と彼女を隔てた物。

それは本人の心の強さもあるだろう。

だが、何よりも家族や友人に恵まれて、知らず知らずの内に支えられて居たからかも知れない。

彼女にはそのような存在は居なかったのだろうか？

いや、居る。

双間優斗と全く同じ様に。

朝日空と言う誰よりも優しい心を持った少女に助けられている所を確かに見た。

では、何故差がついたか。

おそらく、朝日空の力だけでは足りないからだ。

双間優斗には香夜姫として第二の人生を生きる朝日月夜と再会すると言う奇蹟が起きたからだ

。

朝日空と香夜姫。

その二人の少女が居なければ今の双間優斗は無かった。

だったら、簡単な事だ。

自分が彼女にとっての奇蹟になって救ってやるまでだ。

双間優斗は奮起する。

「俺がやる...！！ 俺が彼女を助ける...！！ だからお前はそこで被害を食い止めていてくれ...！！」

決意に燃えて走り出す双間優斗を見て、香夜姫は何よりも嬉しそうに微笑んだ。

感謝～それは共に歩む道～

双間優斗が本館前にあるグラウンドに降りた時、ソフトボールの生徒達は休憩中のようで、各々の場所で汗を拭きつつ水分補給をしている最中だった。

「何で...！！ 何で私ばかり怒られないといけないの...！？ 自分でも好きで失敗してるわけじゃないのに...！！ もう嫌よ...！！ こんな人生なんてもう嫌よ...！！」

水飲み場で金切り声をあげているのは先ほど叱られていた下級生だ。

「奈々ちゃん...、そんな事言わんといてや...！ 誰にだって失敗はあるけど、それを乗り越えて少しずつ先に進んで行くんやから、こんな事で自棄になっちゃ駄目やで...！！」

朝日空はそんな彼女を慰めている様子だ。

しかし、一通り見渡しても暴走を始めた思念の持ち主である上級生の姿は何処にも見られなかった。

双間優斗が自力で探そうにも全く心当たりは無い。

やはり、わざわざ上級生をサポートする為に部活に参加している朝日空の力を借りるのが一番だろう。

あれ以来、顔を会わせて居ないので気まずさはある。

しかも、彼女が取り込み中で大変な状態なのは見れば解る。

だが、今はそんな事を言われる場合では無いと意を決し、双間優斗は朝日空に駆け寄って声を掛ける。

「おい、空...！！ ちょっと良いか...！？」

「ん...！？ 今忙しいんだから後にして...って、なんでお兄ちゃん、こんな所に居るん...！？」

朝日空は突然、双間優斗から話しかけられて慌ててる様子だった。

それもそのはずである。

双間優斗とはまず接点が無い学校で久々の再会を果たしたのだから。

なんと言うべきか一瞬迷ってしまう双間優斗であったが、香夜姫からそのまんまを説明すれば良いと言われていた事を思い出す。

「ああ...、仕事の現場がここだったんだ...！」

「あっ、例の特別研修って奴やね！！」

彼女の反応を見る限り本当に叔母のシナリオ通りの説明を受けていたようである。

それにどのような真意があるのか気になる所ではあるが、双間優斗は目の前の問題に集中する為に真っ直ぐ朝日空を見つめる。

「それより、さっきお前と一緒にいた上級生は何処に行ったんだ...！？」

「瑞樹先輩がどうしたん...？」

双間優斗の真剣な表情に朝日空も事の重大さを察する。

「彼女の心が壊れてそうになっている...！！ だから、助けなきゃならないんだ...！！」

双間優斗の簡易的な説明は的を射ているとは言い難かったが、朝日空は思い当たる節があるようでハッと表情を変える。

「悪いけど奈々ちゃん、ちょっと席を外させてもらおうで...！！」

そして、ヒステリックに泣き叫ぶ後輩とソフトボール部の一団から離れ、校舎本館の裏手にある講義棟の前まで移動する。

講義棟は三角屋根と尖った三角錐の尖った塔屋が特徴的である。

六甲山に面している為に周囲には木々が生茂り、授業の無い休日と言う事もあってかなり静まり返った印象である。

「瑞樹先輩は隣にある芸術館の裏に居ると思うよ...。辛いのが我慢出来なくなると、練習の合間に皆から隠れて独りになってるみたいやから...」

そう言いながら朝日空は涙を零す。

「おい、どうした空...！？」

突然の事に啞然とする双間優斗。

「うち...、自分の無力さが悔しい...。誰かがが苦しんでるって解ってっても、いつても何の力にもなれへんから...」

その身体は小さく震えていた。

「お前は無力なんかじゃないだろ...？」

双間優斗はそんな朝日空の頭を優しく叩く。

「そんな気休めは言わんといて...」

「馬鹿、気休めなんかじゃないって...！！ お前が支えてくれたお陰で俺は救われた...！！ だからそう言えるんだ...！！」

「お兄ちゃん...」

そして、双間優斗は真剣な表情で真正面から朝日空を見つめる。

「ありがとな...、空...！！ それとゴメンな、今まで心配かけて...！！」

それは感情と共に押し殺していた双間優斗の本当の気持ちであった。

「うん...！！」

そう言うと朝日空は嬉しそうに涙を拭った。

「きっと、あの上級生の子だって同だよ。お前が支え続けていたからこそ、ほんの少しの切っ掛けさえがあれば救われると思うんだ...！！」

双間優斗の言葉には今迄にない説得力に満ちあふれていた。

「行こう...！！ 俺の力になってくれ...！！」

朝日空は双間優斗と共に歩める事が嬉しくてたまらなかった。

「うん！！ お兄ちゃんこそ、うちの力になってや！！ 二人で協力すれば怖い物なしやね！！」

しかし、二人が講義棟と隣り合った芸術館に向かおうとした所で、グラウンドの方からヒステリックな声が聞こえて来る。

「もう、ほっといてよ...！！ どうせ私は要らない子なんでしょ...！！」

「また、あの下級生の子か...」

「うん、奈々ちゃんもほっとけんね...」

「お前はあの子についててやれよ...！！ 俺は上級生の方に行って来るから...！！」

そう言って双間優斗は朝日空を後にして走り出そうとする。

「あっ、お兄ちゃん...！」

その遠ざかりつつ背中に朝日空が声を掛ける。

「お兄ちゃんが辛い時は、お兄ちゃんを大切に思ってる人も辛いんやで...！！

だから、自分だけが辛いのを我慢すれば良いって考えは、心配してくれる人の気持ちを無視する自己中な考えも良い所やと思う...！！

もし、人を大切にしたいなら、自分も大切にしなきゃ駄目やで...！！

自分が救われる事で、救われる人もいるんやから...！！

そんで、本当に辛い時には支え合って、本当に楽しい時は笑い合って、一緒に生きてけたら良いね...！！」

「そうだな...！！」

「じゃあ、瑞樹先輩を頼んだで...！！」

「ああ、俺にまかせろ...！！」